

# 小龍の現代史

[蒋介石から陳水扁]

小 林 幹 夫

## 目 次

### 前書き

#### 第1章 江南事件までの道

- 第1節 デイリーシティの惨劇
- 第2節 蒋家の歴史
- 第3節 蒋孝武、総統への障害
- 第4節 江南は国民党の少年兵だった
- 第5節 軍統という名の治安組織
- 第6節 特務工作の再建
- 第7節 国民党と幫会の深い関係

#### 第2章 蒋孝武の挫折

- 第1節 急成長した戦後の台湾経済
- 第2節 国民党政権を支えた公営企業
- 第3節 蒋経国から李登輝へ
- 第4節 シンガポールと日本での蒋孝武

### 前書き

「蒋経国伝」著者の在米台湾作家、江南（本名、劉宜良）が1984年10月15日朝、米サンフランシスコ郊外デイリーシティで殺害された。暗殺実行行為者は台湾最大の暴力団、竹聯幫組長に指揮された組員2人で、事件の背後に台湾総統、蒋経国の次男孝武がいることが、明らかになった。<sup>(注1)</sup>

この事件は蒋家の台湾支配に終止符を打ち、さらにその15年後、野党民主進歩党（民進党）出身の台湾総統が誕生する序曲でもあった。

江南は国民党に情報を提供しながら、中国要人にも会見し、二重スパイとみなされていた。

国民党側から金をもらって「蔣経国伝」の書き直しに応じながら、蔣経国の仇敵であった呉国楨（元台湾省主席）の伝記を執筆する準備を進め、その中で蔣経国と党の旧悪を暴露するおそれがあった。蔣家は、国軍情報機関と暴力団を使って江南を暗殺した。訴追された関係者は、情報工作者として育成された江南が党を裏切ったため、懲罰を加えた、と主張し、蔣経国、蔣孝武の責任は問われなかった。

事件が起きる半年前、84年5月、蔣経国が総統に再任された。江南事件は高齢の蔣経国の後継者として、孝武の名が取りざたされていたさなかに起きた。しかし江南事件に蔣孝武が関与したと米国で報じられるに及び、後継説は消えた。米政府は自国内で自国民（江は二重国籍の米国人）が台湾の公的機関の指示と支援を受けた暴力団に殺害されたことを追及し、台湾への武器輸出停止をほのめかして、犯人引き渡しと関係者の処罰を台湾政府に求めた。素行の悪さや私生活の乱れから、総統候補として適任とは言いがたかった蔣孝武を蔣経国が公式に後継者から外したのは、米国からの圧力を受けてからかなり日が経った1985年12月25日であった。

蔣経国の民主化はそれ以後、加速した。野党・民進党結成（86年9月28日）、戒厳令解除（87年7月15日）、中国大陆里帰り解禁（同11月3日）と続いた。

蔣経国は1988年1月13日、死去した。李登輝が即日、総統に就任した。それから12年。李登輝の政治改革は実績を挙げ、後継者として連戦副総統を指名した。

しかし、2000年3月の台湾総統選挙で、民進党の陳水扁候補が当選した。国民党の連戦候補は大差で破れた。半世紀にわたって台湾を支配してきた国民党は野党に転落し、日本円にして2兆円に達するともいわれる党有資産をめぐって、党内対立が表面化した。

陳水扁は総統当選後、李登輝と協議して、唐飛・国防相を行政院長（首相）に指名し、歴史的な連立政権が誕生した。

李登輝は総統候補に国民党の本流を歩んできた宋楚瑜（省主席、省長）を指名しなかった。宋が台湾省政府廃止に反対するなど李登輝と確執があったことや資金疑惑が取りざたされたことなどが、原因として報じられた。宋は蔣家とのつながりが深く蔣孝武を擁立したことがあり、江南事件にも関与していた、と報じられた。

江南事件の淵源を尋ねると、そこには戦後「小龍」と称されたアジア新興工業国・地域（NIES）の雄、台湾の裏面が露呈していた。蔣家三代の歴史は国民党野史であり、蒋介石から陳水扁までつながる「小龍の現代史」でもある。

## 第1章 江南事件への道

### 第1節 デイリーシティーの惨劇

西海岸のサンフランシスコから海沿いに南下したデイリーシティーは丘の上まで小規模住宅がびっしりと立ち並んでいた。このあたりは華人が多く住む。北太平洋の寒流は米北西部の岸壁を洗いながらサンフランシスコ沖に達する。寒流のおかげで夏涼しく冬暖かい。台湾

出身の作家、江南の住まいもここにあった。ヒルビューコート 74 番地。

江南の家の二階書斎からはソートン海岸の太平洋の海原が望見できた。朝のさわやかな日差しが江南の住宅の奥深くまで注がれていた。午前 9 時 20 分、江南は二階の寝室から階下に降りた。

サンフランシスコの繁華街フィッシャーマンズ・ワーフで土産物屋を営んでいた江南は毎朝、車で通勤していた。開け放たれた車庫には一台の車が置かれていた。夫人が子どもを送るのに使ったもう一台の車は路上にあった。自宅前の芝生は目に痛いほど鮮やかであった。江南が台所の勝手口から荷物を車に積み込もうとしていたとき、背後で「アメリカにいたら誰もお前に、教訓を与えないと思ったら大間違いだ。劉宜良」という声がした。

「なんだおまえ達はとっと出ていけ。警察を呼ぶぞ」と江南は応酬した。

38 口径のリボルバーが江南の顔に付きつけられた。払いのけようとした江南の手が銃口に届くより早く、はじけたような乾いた音が響き、銃弾が江南の右顔面に命中した。江南を撃つたのは台湾最大の暴力団・竹聯幫組員、呉敦（当時 35）だった。相棒の董桂森（同 32）は血まみれの江南を冷ややかに見下ろし、江南の腹部にさらに 2 発の銃弾を撃ち込みとどめを刺した。

江南夫人の崔蓉芝が銃声を聞いてガレージに駆けつけたところ、犯人は自転車で逃走した後であった。二人は自転車をこぎながら人影のない草むらで、付け髭、かつら、小銃を投げ捨てた。そして、示し合わせてあったとおり路上で待ち受けていた竹聯幫関係者の車に乗り込み逃亡した。呉と董を現地で指揮した竹聯幫・組長、陳啓礼（41）は、二人がホテルに戻ってくると、国際電話をかけ、国防部情報局第三処代理処長の陳虎門（42）に「商売は成功した。効果のほどは明日分かる」と述べた。

「商売の成功」は暗殺の成功を意味した。

呉、董、陳の 3 人は暗殺 4 日後の 19 日、ヒューストンへ飛び竹聯幫関係者と会った後、20 日ダラスからタイ航空機で東京へ向かった。東京でノースウエスト航空機に乗り換え、21 日午後 9 時過ぎ、台北に帰着した。

空港には国防部の陳虎門が出迎え、税関検査も受けず空港玄関前に横づけされていた公用車に乗り込んだ。

10 月 24 日、陳啓礼は台北郊外の国防部情報局招待所で局長の汪希苓海軍中將（58）に会って、任務の完了を報告した。汪希苓は「大手柄だ」と笑みを浮かべ、3 人の労をねぎらった。しかし、それから 1 カ月もたたない 11 月 12 日夜、陳啓礼は国家安全局による全島一斉暴力団狩りで逮捕された。呉敦は 25 日に逮捕され、董桂森はフィリピンへ逃げた。

米連邦捜査局（FBI）とデイリーシティ警察署は 29 日、江南暗殺犯人が陳啓礼、董桂森、呉敦の 3 人であると、記者会見の場で発表、台湾当局は 30 日になって、陳、呉の逮捕と董桂森を取り逃がした事実を発表した。米側は犯人の引き渡しを要求したが、台湾は犯人引き渡し条約が米国との間にないことを理由に身柄引き渡しを拒否した。

陳啓礼は公安機関である法務部調査局に11月14日、台北市警察局から身柄を移され取調べを受けた。

年が明けた1985年1月10日、蔣経国は国家安全会議を招集、国家案全局に対し国防部情報局副処長の陳虎門を逮捕し、情報局長の汪希苓と副局長の胡儀敏陸軍少将(58)の身柄を拘束し軍法会議で尋問するよう命じた。

在米大使館とも言うべき北米事務協調委員会の錢復代表は、蔣経国に台湾の軍事機関が江南事件に関与している事実を米国側がつかんでおり、このまま放置すれば米台関係は抜き差しならない局面に立ち至らざるをえない、と報告してきた。

陳啓礼は江南暗殺に至る経緯を吹き込んだテープを密かに竹聯幫構成員である米カリフォルニア州モントリーパーク、中華料理店経営、張安楽に託していた。張は香港「文匯報」にこの事実を漏らし、1月8日付けで同紙は報じた。国家安全会議はこれを受けて開かれたのだ。FBIも11日、張からテープを入手した事実を公表した。

2月27日、陳啓礼と呉敦が起訴され、4月9日、台北地方法院(地裁)は二人に、殺人罪で無期懲役の刑を言い渡した。両被告の控訴を受けて開かれた二審の高等法院は6月3日、一審の判断を支持し再び、両被告に無期懲役刑を言い渡した。

国防部高等審判庭(軍事法廷)は4月19日、軍人3人に判決を言い渡した。殺人の共同正犯として汪希苓に無期懲役、殺人幫助罪で胡儀敏、陳虎門の両被告に懲役2年半の実刑判決を言い渡した。二審も5月30日、原判決を支持し、汪に無期懲役、胡、陳に2年半の懲役刑を言い渡した。

軍事法廷判決文は、汪情報局長が江南暗殺を暴力団員に指示した実行に至る過程を、次のように述べている。<sup>(注2)</sup>

汪希苓は白景瑞(映画監督で汪希苓の友人)の紹介で1984年5月、竹聯幫組員の帥獄峰(映画プロデューサー)と会った。帥は竹聯幫が米国、フィリピン、香港などに人脈を持っており、情報局が大陸向け情報活動展開に役立つと述べ、竹聯幫の中での自分の力は限られており、竹聯幫組長の陳啓礼と会うよう勧めた。汪は竹聯幫を使うことが大陸工作の突破口となると考え、帥と白に陳啓礼との会見を手配するよう求めた。

7月28日、白は新居完成の祝宴を催し、汪希苓、帥獄峰、陳啓礼の3人を引き合わせた。

8月2日、陳啓礼は汪希苓の招きで白、帥とともに情報局招待所に赴いた。その席で、汪は副局長の胡儀敏を陳に紹介し、(食後歓談の際)竹聯幫を陳が「正しく指導し、国家の役に立たせるよう」求めた。陳と帥は「情報局の大陸工作に協力し、お役に立てれば、と願っているが、どのようにやるのか分からない」ので、情報局の指導を求めた。汪は考慮すると約束した。そして在米華僑の問題に話が及び、汪は国家に養成された人物が出国後、国家に損害を与える言行をなす者もいる、と嘆いた。汪はその年の6月、友人の夏曉華・台湾日報元社長から、江南が汪に不満を持ち、将来、彼に不利な行動を起こすおそれがあることを知らされ、これを阻止する必要があると思った。<sup>(注3)</sup>

そして、この場で、江南の名を「国家に害を与える人物」の一人として汪は挙げ「国家が養成した人材であるにもかかわらず、政府のイメージをしばしば破壊する言論をなしている」と批判した。

陳啓礼は「この種の人物には教訓を与えるべきだ。私に任せてもらいたい」と述べた。汪情報局長は陳が教訓をあたえることに同意した。

8月14日から汪の指示を受けた胡儀敏、陳虎門の手配で、陳と帥はそれぞれ鄭泰成、謝振業の偽名で情報局訓練センターに行き、4泊5日の予定で暗号、写真技術、中国情勢などについて講義を受けた。

8月15日午後、様子を見に来た汪は陳、帥のほか胡儀敏、陳虎門、訓練センター主任の楊志祥らと昼食を共にした。食事後、陳啓礼は江南に「教訓を与える」件を再び持ち出し、江南に関する資料を要求した。汪は「教訓」については機会を見てやるようにといい、資料は後で渡すと約束した。

8月18日午後、講習終了後、陳虎門と陳啓礼は互いに連絡先を教えあった。

9月初め汪は陳、帥の米国行きを知り、胡儀敏に江南の写真や住所などの資料を情報局第5処から取り寄せさせた。数日後、汪希苓は2人の送別会の席で自ら手渡した。

9月14日、陳啓礼は妻の陳怡帆と帥獄峯を伴い、訪米の途に就き飛行場には陳虎門が見送った。陳啓礼らはロサンゼルス到着後、同地の竹聯幫分子と会い、サンフランシスコのフィッシャーマンズワーフに向かい、江南をつけ狙った。

しかし、江南が外出先から帰らず、折りからの交通ストの影響で警戒嚴重であったことなどから一旦あきらめ、9月22日に陳と別れて一足早く帰国した帥は陳虎門に「フィッシャーマンズワーフはストライキ中で警官が多く、江南の件は以後、機会をうかがって、またやることにする」と報告した。

9月末、陳啓礼は米国から電話で帥獄峯に、江南の件は呉敦と董桂森を使って処理しなければならない、と伝えてきた。帥はこれを陳虎門に、陳虎門はさらに汪希苓に伝えた。呉敦と董桂森が米国に向かい、米国で陳、呉、董の三者が協議し、呉、董が手を下し、陳は後方に控えて首尾を見守ることで一致した。そして、決行に至るのだが、汪希苓は上層部に事件について、自分から報告しなかった、という。

要するに、江南事件は台湾政府が関係しない、汪希苓の個人レベルの犯罪ということになる。これには汪希苓も、抵抗があったらしい。検察官が「汪希苓はかつて駐米中華民国大使館駐在武官として勤務中、江南と親交を結び、その際、江南に自らの弱点を握られたため暗殺を決意した」と「汪私怨説」を展開した。しかし、汪は公判で「江南と付き合っていたのは事実だが、武官として情報収集の職務上の付き合いであり、江南に弱点を握られていたという論告は承服しがたい。証拠があるのなら出して欲しい」と反論した。

竹聯幫の陳啓礼は(1)江南を殺害する気はなく、教訓を与えるだけの目的だったが、江南が反抗的態度をとったために射殺した(2)しかし、江南が大陸から国民党とともに台湾に

やって来て苦労したことや父親が共産党員に殺されたことなどを知り、殺害を後悔している  
(3) 江南に「教訓を与える」気になったのは、江南が国民党の工作員でありながら“蔣経国伝”を書いて蔣総統を誹謗し、なおかつ中国にも情報を流していた裏切り者であったからだ——と主張した。<sup>(注4)</sup>

陳らが主張する愛国的動機について、一審、二審とも、愛国的熱情があったことを否定しなかった。しかし、江南暗殺を買って出たのは、政府が84年5月から9月までを暴力団集中取締り期間として暴力団員の自首を勧め、自首しない者に対しては厳罰をもって臨むと発表、その処罰を免れるため、まず竹聯幫組員の帥獄峯が汪希苓に接近し、陳啓礼を引き入れた、とし「処罰逃れ」が陳啓礼の基本的動機である、と認定した。

江南が具体的に汪希苓に対しどんな恨みを持っていたのか、刑事、軍事いずれの法廷でも明らかにされなかった。汪希苓に江南暗殺を命じた黒幕の存在については触れられずに終わった。事件に関与したと報じられた蔣孝武は、台北市内で記者会見し、事件との関連を否定した。<sup>(注5)</sup>

裁判の進行中、中国情報では定評がある香港誌「争鳴」は85年3月号に「江南事件の首謀者は誰か」と題する次のような記事を掲載し注目された。

江南暗殺の主犯である陳啓礼は緑島の刑務所暮らしを終え、出所後は消防器具の販売に手を染め、かつての仲間との付き合いは断っていた。

1979年に美麗島事件が起きた後、蔣孝武、蔣孝勇兄弟が陳啓礼を訪ねた。孝勇は1948年生まれ、台湾大学政治学科を卒業、国民党が経営する中興電器会社の董事長（会長）、台湾グラスファイバー公司総経理（社長）、台湾電器材料同業公会理事長。

兄弟は蔣家に入出入している顧振家という男の紹介で、陳啓礼に会い、竹聯幫を発展させ、動乱発生の際は蔣家のために働くよう求めた。陳はヤクザの世界に戻る気はなかったので、即答しなかった。蔣家ではこの頃、フィリピンの小島を密かに買収し、最悪の事態に備えていた。

蔣孝武は部下の林嘉麒を通じて陳啓礼との接触を保ち、陳が子分を率いてフィリピンのその島に渡り、親衛隊として蔣家を守るよう求めた。しかし陳は渋って返事をしなかった。

こうした接触が続いているとき、竹聯幫の子分達が警察に相次いで逮捕されたため、1981年ごろ、陳は国民党高官が利用する「自由の家」に竹聯幫の子分を集め、頭目としての復帰を宣言した。「自由の家」は台北市内の高級住宅街にあり、隣には嚴家淦前総統の邸宅がある。ヤクザが党高官専用施設を使用するのは、考えられないことだ。蔣家の紹介で可能になったことは間違いないだろう。陳啓礼が親分に復帰してから竹聯幫は構成員7万に及ぶ台湾最大の暴力団にのし上がった。

この時期、蔣総統の健康は優れず、蔣孝武が国家安全会議執行秘書の職に就いた。蔣孝武は陳啓礼を情報局の一員とした。陳は情報局の連絡記号と番号を持った正式な連絡員として登録された。陳は情報局での連絡用の姓は鄭であった。

1984年4月、陳啓礼は初めて米国を訪問した。そのとき同行したのは蔣孝勇の部下だった。5月中旬、帰国した陳に情報局長の汪希苓は映画製作者の帥獄峯を通じ、7月末に台北郊外、陽明山の麓、天母にある情報局訓練所に入るよう連絡した。

陳と帥は10日間の訓練を受けた。江南暗殺に備えた実習であった。8月中旬、陳啓礼は陽明山にある情報局招待所で開かれていた特務会議に参加、そこで汪希苓局長は蔣孝武の命令として、江南暗殺を命じた。

「劉（江南）は国民党が養成した台湾の情報工作要員であったにもかかわらず、国を裏切り、中国共産党に通じたため、制裁を与えなければならない」一。

陳啓礼は蔣家の恩顧に報い、国家に尽くすため江南殺害を決意した。この様子は、陳啓礼がテープに詳しく吹き込んでおり、その1本は米連邦局（FBI）に保管されている。陳の命令で江南を射殺した呉敦は事件直前の1984年9月に結婚しているが、結婚の保証人は蔣孝武の叔父にあたる蔣緯国である。蔣緯国は陳啓礼と付き合いがあり、陳から楽器をプレゼントされたりする仲であった。

以上が「争鳴」の概要であった。

蔣緯国は蔣経国の異母兄弟ということになっていたが、実は国民党幹部、戴季陶が日本女性に生ませた子であった。戴は当時、孫文が東京の大森に創立した体操学校（黄埔軍官学校の前身）の教育長で、蒋介石はその庶務課長をしていた。戴の妻がやかましかったため、蔣の子とし、蔣の第2夫人姚怡琴に上海で養育させた。

蔣緯国は台湾の私立東呉大学卒業後、ドイツに留学、陸軍士官学校に学んだ後、米ケンタッキー州の第1装甲軍団に入り訓練を受け、米マックスウェル航空部隊技術学校に学んだ。

1945年に戦車連隊長に任官、陸軍装甲部隊司令、陸軍参謀大学校長、三軍大学校長、聯勤総司令、連合作戦訓練部主任を歴任後、国家安全会議秘書長に就任した。

この争鳴の記事が出たのと同じ頃、1985年3月13日、米華字紙「北美日報」は陳啓礼の「親友」に作家の李惠英女史がインタビューした記事を掲載した。この「親友」には米三大ネットワークの一つと当時いわれたCBS放送もインタビューし同月3日付けで放映した。「北美日報」の報道内容は「争鳴」と大筋は同じだが、内容はより詳細であった。取材源は、在米中国人マフィアであることをうかがわせる。

1985年1月26日号の米華字誌「美麗島」に、一通の投書が寄せられた。投書の主は1984年末に元老クラスの国民党高級幹部と会談し、次のような話を聞いた。

蔣経国は江南問題の処理についての話は聞いていたが、具体的処理について決定していなかった。決定者は蔣孝武、沈昌煥、宋楚瑜であり、機関としては外交部、国防部、華僑事務委員会、国民党海外工作会が関与していた。

宋は後に李登輝が党主席に選ばれる際、重要な役割を果たし、さらに台湾省長から総統選挙に立候補して僅差で落選した。

1983年7月、新聞局長だった頃、宋はサンフランシスコで江南と会い、江南に「蔣経国伝」

出版翻意を迫ったが、江南は最後まで首を縦に振らなかった。宋は帰国後、蔣孝武に江南の態度を報告し断固たる措置を取るよう進言した。蔣孝武は江南殺害に傾いたようだ。

1984年、「呉国楨との単独会見記」を発表した。呉国楨は1949年当時、台湾省主席で蔣経国と対立して失脚、米国にその後滞在した。江南は呉が会見後、訪中するのを手助けした。また江南自身、大陸の当局者との接触が頻繁になり、84年の国慶節（10月1日）に参加しようとした。蔣孝武は最終的に暗殺を決意した。

蔣孝武は江南暗殺について蔣経国にお伺いをたてたが、蔣経国は即答せず、総統秘書長の沈昌煥と相談するように、と言うのみであった。沈はレーガン大統領が再選され、米国の親台湾派は力があるため、江南を米国で暗殺したところで、大したことにはならないだろうと踏んでいた。

しかし老練な沈は責任を一身に負うのを避けるために、秘密会議を招集して協議した。この会議には外交部の丁懋時（てい・ぼうじ、政務次長）、国防部の張国英（副部長）、僑務委員会の曾広順（委員長）、既に新聞局長から国民党文化工作会主任に転じていた宋楚瑜が出席した。宋が党を代表して出席した。

この会議で海外華僑が国民党から離反しないように、見せしめとして江南を処刑することが全員一致で決まった。

宋楚瑜は席上（1）中国はロサンゼルス・オリンピックでの中国選手の活躍ぶりや、香港の主権回復、国内の開放政策や自由化などあらゆる機会、政策、話題を利用して華僑を取り込もうとしている（2）このため国民党は受け身に立たされており、江南を殺害するのはこうした情勢を挽回し、華僑向け工作を推進する上で有益である一と述べた。

江南の暗殺方法について、交通事故、ガス爆発など様々な殺害方法が討議されたが、「見せしめ」のために、銃殺刑を適用すべきであるとの意見が出され、最終的には在外公館の協力の下で暴力団を使って江南を銃殺することが決まった。

沈昌煥は会議の決定内容を蔣孝武に伝えるとともに国家安全局顧問の1人を使って竹聯幫と連絡を取った。竹聯幫組長の陳啓礼は蔣孝武と面談を求めたが、蔣孝武はこれに応じず、陳と電話で話すにとどめた。この電話の中で、蔣孝武は江南暗殺を自分が日本を訪問し台湾にいない間に実施する必要がある、と陳に告げた。

会議に参加した各部門は直ちに暗号電文を用いて各在外工作員に江南暗殺の手配を命じた。台湾の在米大使館にあたる北米事務協調委員会の総代表である錢復（元外務次官）とサンフランシスコ、ロサンゼルスの特設事務所長は外交部から訓令された。

江南暗殺に在米華僑は激しく反発し、犯人を追及する組織的運動を展開した。米国世論も江南事件を問題視した。ニューヨーク・タイムズのフォクス・バターフィールド（同紙元北京特派員、著書「中国」で大陸の実態を活写）が12月4日付け紙面で、国民党と竹聯幫、陳啓礼と蔣孝武の結びつきを暴露し、江南暗殺の背後に蔣孝武いることを示唆した。レーガン政権は、事件当時、国際テロリズムに反対する運動を展開していた。江南事件はレーガンを



困惑させるに十分な事件であった。

こうした展開に沈昌煥も当惑した。台湾当局は情報工作員を犠牲にして事件を收拾しようとしたが、それでは収まらず、暴力団の一斉取締りを実施し、実行犯を逮捕した。

蔣孝武ら上層部の責任追及がなされていない。蔣経国も計画に積極的に参加していないが、責任を取って辞任すべきだ。

投稿者は以上の内容の文を1985年1月17日に執筆した、としている。

蔣経国が呉国楨にしこりを持ち神経質になるのはなぜか。スターリング・シーグレーブによると、呉が宋美齡と密接な関係にあったからだと指摘している。<sup>(注6)</sup>

蔣一族は1940年代、大富豪の宋一族から上海の支配権を奪回しようとしていた。宋系統の揚子公司が欧米の人道援助物資の横流ししていた事実を突き止めた蔣経国は揚子公司総支配人の孔令侃（孔祥熙の長男、宋美齡の姉の宋靄齡は孔祥熙の妻）を逮捕し、極刑を科そうとしたが、上海市長だった呉が宋美齡に連絡し、美齡は蔣介石を動かして孔を釈放させた。経国はこれを根に持って、その後も呉を目の敵にしたという。経国は呉が自分の失脚を画策していることを知り、省主席だった呉が妻と共に乗った車に危険物を仕掛けたこともあったという。

江南は蔣家内部の恥部ともいうべき部分、政治的に鋭敏な部分を暴露しようとしていた、と蔣家からみられていた可能性が濃い。宋美齡と蔣経国は対立していたが、蔣孝武と美齡とは関係良好であった。美齡は孫である孝武の総統就任を願っていた。

蔣孝武は江南事件発生前日の1984年10月15日（事件発生は米西部時間の15日、台湾時間の16日）に自民党青年部の招きで訪日した。

空港には親台湾派の大物だった、藤尾正行・自民党政調会長（その後、文相）が出迎え、下旬まで日本に滞在、その間、中曽根康弘首相とも密かに会談した。

江南暗殺事件の犯人3人組は10月20日、ダラスからタイ航空機で東京に向かい、21日、成田でノースウェスト機に乗り換え、同日午後9時過ぎ台北に帰り着いた。犯人と蔣孝武が21日、東京首都圏の空の下に居合わせた、という事実は確認されている。

前述のシーグレーブによると、犯人が台湾国防部に米国から入れた電話は米国家安全保障局のスパイ衛星に盗聴され、ワシントンは事件の全貌と太平洋兩岸の関係者全員の氏名をつかんでいた、というから、犯人が成田国際空港から東京にいる蔣孝武に電話し、米側に盗聴されていたとしても不思議はない。<sup>(注7)</sup>

米国は1985年1月22日、真相解明のため捜査官3人を台湾へ派遣した。汪希苓・情報局長と胡儀敏・同副局長の逮捕を公表した。2月6日、ケネディ、クランストン、ベル各上院議員らは、陳啓礼、呉敦の引き渡しを要求する決議案を上院に提出した。ケネディらは国民党の恐怖政治を非難し、米国で裁判を行うよう求めた。2月7日、米下院外交委員会のアジア太平洋小委員会は陳啓礼、呉敦の引き渡しを要求する決議案を全会一致で可決した。この決議案は4月16日、下院で387対2の圧倒的多数で可決された。

## 第2節 蔣家の歴史

蔣孝武の祖父、蒋介石は1887年10月31日、浙江省奉化县溪口镇で生まれた。介石は字（あざな）で、正式には中正という。

日清（甲午）戦争で、清が日本に敗れた1895年蒋介石は当時、数え年で9歳。1894年12月に祖父・玉表が世を去り、翌年7月には父、肅庵も54歳で死去した。

母・王采玉と蒋介石の二人だけの一家は、清朝の不良官吏や地方ボスに目をつけられ、財産を簒奪された。溪口の旧家、地主で塩舗（塩販売）を営む蔣家は没落した。母は商店街の一角に店を出し蒋介石の学費を捻出した。13歳で故郷を離れ、母の郷里である嵊県葛溪の私塾に学んだ後、いくつかの私塾、学校を転々とし、1906年4月、19歳で日本へ留学した。大国ロシアを破った日本は憂国の青年にとって、あこがれの国。その日本で革命家、陳其美と知り合い革命運動に入り、その冬いったん帰国した。

翌1907年、中国初の軍官学校、保定軍官学校に入り張群（後に蒋介石の右腕となった総統府資政）と知りあう。1908年に軍事留学生として東京の振武学校（清朝派遣軍事留学生専門の陸軍予備学校）に入学、中国革命同盟会に加盟。1910年に東京で孫文と会い、同年12月、新潟県高田（上越市）の野砲兵第19連隊に入隊した。この年の3月18日、蔣経国が誕生した。日韓併合は8月に行われている。

1911年、長期休暇でいったん上海に戻り、10月はじめ高田に帰って間もなく辛亥革命が勃発、急遽帰国して杭州の武装蜂起に参加。高田から上海に着いたのは10月30日、24歳の誕生日の前日であった。上海で陳其美から指示を受け、杭州に向かい、制圧後、上海に戻った。1912年に中華民国が成立し、初代大総統に孫文が就任。蒋介石は再び訪日。翌年、さらに翌々年と蒋介石は2度にわたり上海で袁世凱（孫文の後を継いだ大総統）打倒の軍事行動を指揮した。が、2度とも失敗。1914年第1次世界大戦勃発。日本はこの機に乗じて1915年、21カ条要求を中国に突きつけ、反日機運が大陸にみなぎる。

1917年、ロシア10月革命。この年、孫文は広州で中華民国軍政府を樹立した。蒋介石は孫文の命令で党務、軍務を統轄した。その後、黄埔軍官学校初代校長を経て、1926年国民革命軍総司令となる。しかし翌27年には下野し、日本を訪れ、田中義一首相と会談し、日本の対華侵略について認識を深める。さらに、この年、蒋介石は宋美齡と結婚している。

ところで蒋介石は生涯4人の女性と結ばれている。<sup>(注8)</sup>

蔣経国の実母、毛福梅とは1901年結婚。中国流の数え年で蒋介石が15、毛福梅が18。美人の誉れ高い姉さん女房だった。

毛福梅は溪口の実家で、蒋介石の母の世話をしながら長男の蔣経国を育てた。蒋介石は宋美齡と結婚するまでに姚怡琴、陳潔如という二人の上海出身の芸妓を落籍し、妾にしている。次男とされる蔣緯国は前述したように事情あって、蔣が引き取り姚怡琴に養育させた。姚怡琴は1969年に台中で病死した。一方、陳潔如は1920年代初期に蒋介石と結ばれたが、蒋介石が宋美齡と結婚するに当たり、上海の「地下市長」杜月笙の世話で渡米、サンフランシス

コ郊外に居住後、香港に移り、1973年、香港で客死した。

中国国民党は1919年、共産党はその2年後、1921年設立された。水と油のごとく相容れなかった両党だが、共通点も少なくなかった。両者は1924年に第1次国共合作を成立させたが、27年に蒋介石が反共クーデターを起こし、敵対関係に転じた。

1928年、蒋介石は国民革命軍総司令に復職、全国統一に成功し国民政府主席に就任した。1932年、満州国が成立し、日本では5・15事件が起きた。首相・犬養毅は孫文の友人でもあり日中両国共存の道を模索したが、志半ばで、海軍青年将校によって暗殺された。

1933年、日本は国際連盟を脱退した。蒋介石の国際社会での多数派工作が功を奏し、日本は孤立し、英米との関係は悪化の一途をたどった。

1937年の盧（廬）溝橋事件で日中両国は全面戦争へ突入。南京が陥落し国民政府は重慶に遷都した。蒋介石が張学良に監禁される西安事件（1936年12月）をきっかけに第2次国共合作が成立。1938年、対日和平派の汪兆銘が重慶を脱出した。

蔣経国は孫文が死去した1925年に、父の命令でソ連に留学。モスクワの孫逸仙大学に入学、政治教育を受け、1928年秋に卒業、レニングラードの紅軍軍政学校に進み、1930年6月、同校を卒業。そしてモスクワ郊外の発電機工場や農村で働いた。中国共産党代表で、コミンテルン執行委員の王明（陳紹禹）が、蔣経国のシベリア送りを主張したため、1932年にアルタイ山脈の鉱山へ鉱夫として送り込まれた。王明はモスクワに党代表として、滞在し、蒋介石の反共政策を憎悪していた。

スターリンは蔣経国を人質としてシベリアに送り、機械製造工場の技師として働かせた。1934年には4000人の労働者を擁する作業所の所長に蔣経国はなった。その作業所で蔣経国は1935年3月、ロシア女性ファンニーナ（蔣方良）と結婚した。この年の12月、長男、蔣孝文が生まれ、翌36年には娘、蔣孝璋が生まれた。

蔣経国がソ連を離れるのは1937年3月、27歳になっていた。ソ連滞在は12年半にわたった。第2次国共合作の成立が蔣経国の帰国を可能にした、といえるだろう。

1939年に第2次世界大戦が始まり、翌40年には日独伊三国同盟が成る。日本占領下の南京では汪兆銘が国民政府を名乗った。1941年、日米開戦。翌42年、蒋介石は連合軍中国戦区最高統帥となった。

蒋介石と米国の関係に不調の兆しが表れた。問題は中国共産党であった。蒋介石の目から見て、米国の認識は甘く、中共の民族主義政党の側面を過大評価している。

一方、米国からすれば、蒋介石は日本との決戦を避け、共産党攻撃に主力を割き、米国の援助を浪費する他国依存型の指導者と映った。

蒋介石は日本軍を、内陸部深く誘い込み、兵力の消耗を待つ戦術を採用した。日本の敗戦は時間の問題だと思っていた。

蔣経国は1937年に帰国すると、江西省で青年問題に取り組み、1943年に江西省政府委員、1945年に国民党第6回全国代表大会江西省代表に指名された。同年6月から7月にかけて国

民政府代表団員として訪ソ、中ソ友好同盟条約を締結した。

1946年、共産党と国民党の内戦が始まり、1949年、大陸は共産党の手に落ちた。

蔣経国は国防部総政治部主任に任命され、政治工作を担当した。1965年国防部長に就任するまでの間、中国青年反共救国団主任として、青年運動に力を入れ、また特務組織の再建にも当たった。69年には国防部長から行政院副院長に昇格した。同時に、国際経済合作発展委員会主任を兼ね、経済問題にも取り組み老齢の蒋介石を助けた。72年に行政院長に昇格。閣僚や台湾省主席、台北市長のポストに台湾省出身者計8人を起用、台湾人重視の姿勢を示した。

中国の国連加盟を前に、1971年、中華民国は国連を脱退、72年には日本と外交関係を断絶した。ベトナム戦争での米国の敗北が決定的となった75年4月、台北で蒋介石は失意のうちに87年の生涯を閉じた。

蔣経国は蒋介石の後を継いで75年に国民党主席、78年、総統に就任した。

蔣経国はソ連から帰国後、妻ファンニーナとの間に、次男、孝武、三男孝勇が生まれた。蔣孝武は1945年4月25日に生まれた。原籍は浙江省奉化県である。成績不良で落第を経験しながらも何とか高校を卒業、予備役に入り、軍事訓練を受けた。1966年、21歳でドイツのミュンヘン政治学院に留学した。卒業後、米国に一時滞在、25歳で帰国した後、中国文化学院中米関係研究所で研究活動に従事。その傍ら、財界、党、政府の活動にも参加。国民党中央政策委員会専門委員、国軍退役将兵補導委員会参事、中央放送局主任、中国放送公司總經理（社長）、中華民国放送電視（テレビ）事業協会理事長などの職を歴任した。党の文化宣伝、組織工作などを経験した後、上記の民間放送事業に携わり、江南事件後、1986年2月、外交官でもないのに台湾商務代表団副代表としてシンガポールに転出した。

ドイツ留学中にスイス人女性と知り合い、米国で結婚、蔣友松、蔣友蘭の一男、一女をもうけた。後に、離婚し、シンガポールで台湾人女性と再婚。兄の蔣孝文が不治の病を患い廃人同様になったため、後継者として、蔣孝武は幼いときから周囲の期待を集めていた。台湾警備総司令部によって台湾での出版が差し止められ香港の廣角鏡出版社によって1986年出版された「蔣家三代のロマンス」（台湾生根叢書）によると、蒋介石は蔣孝武が最初の結婚するに当たり、1969年12月9日、次の手紙を送った。

わが孫、武よ。お前の手紙、長い英文の詩、すべて受け取った。うれしい限りだ。祖母は病気後、右手が不自由で手紙をしたためることができない。近頃日増しによくなり心配しないように。お前たちが外国で結婚するので、（私は）出席できない。結婚したら早く帰国し、顔を見せてほしい。お前の母が米国に行き、このお祝いを届ける。本当におめでとう。祖父母より。

細面の夫人は夫とともに帰国したが、公の場に姿を現すことはほとんどなかった。1976年ごろ、蔣孝武は離婚し、夫人は台湾を去った。「蔣家三代のロマン」によると、蔣孝武はシンガポールで再婚する前、フィリピンの著名実業家、鄭綿綿と秘密結婚をした、という。1984年4月2日、二人はルソン島で挙式したが、花婿が再婚、花嫁が初婚ということで、近親者の

みに披露ということになったらしい。花嫁は当時 20 代ながら父親からみっちりビジネスの手ほどきを受け、東南アジア有数のやり手実業家として知られる。鄭綿綿は、かつて誘拐されたことがあった。被害者側の鄭家は腕利きのガンマンを雇い誘拐グループを逆襲し、十数人を射殺して救出した。鄭家はフィリピン有数の華人財閥で、アキノ大統領を送り出したコファンコ財閥とも親しい。政情不安のフィリピンにあって、政治的後ろ盾を求めて蔣家との縁組を承諾したのかもしれない。秘密とはいえ、挙式 2 年もたたずに破談になるのは、江南事件によって、蔣孝武の運命が暗転したためか。

蔣孝武はシンガポールに赴任すると、蔡惠媚という 28 歳の台湾生まれの女性と結婚した。蔡が 18 歳のとき、友人と円山クラブの喫茶室で友人と談話しているのを蔣孝武が見初めたという。蔡はアメリカン・スクールに学び、米国留学を希望したがかなわず、結局、10 年にわたる蔣孝武のプロポーズを受け入れ結婚したらしいが、蔡家の側にも蔣家を利用した節がある。1979 年、軍が「佳山プロジェクト」という開発計画を進めた。蔡家は蔣孝武を利用して軍事機密扱いの内容を入手、外部の者に許認可権を持っていることを匂わせて 5000 万元という大金を巻き上げた、という疑惑である。台湾の一部マスコミによって報じられた。蔡惠媚自身、蔣孝武の関係を利用して現地への「通行証」を入手したという。このスキャンダルが明るみに出たこともあって、急遽、結婚ということになったのかもしれない。1986 年 4 月 11 日、シンガポールのシャングリラ・ホテルで二人は結婚した。

長身で顔の彫りが深く、中国人離れした風貌。射撃が好きで、竹聯幫とは江南事件の前から付き合いがあった、という。竹聯幫は蔣孝武の歓心を買おうとして美人スターを世話したのが、両者の関係が緊密になるきっかけという説もあるが、テレビ業界の有力者でもあった蔣孝武がスターと懇ろの関係になるのに、竹聯幫の世話など必要としなかったかもしれない。蔣孝武の女性関係が前妻と不仲になる一因であったらしい。

蔣孝武が公の舞台での活動が目立つようになるのは 1982 年 5 月の韓国訪問からである。このとき、全斗煥大統領と会見している。83 年の放送記念日には、宋楚瑜・新聞局長とともに、記念式典に現われ「今日からわれわれは自らを省みて、共に（社会に）貢献しよう」と挨拶した。写真入りで各紙が報じたため、台湾の民衆に蔣孝武の顔は知れ渡った。

84 年 10 月、自民党青年局の招きで日本を訪問。前述したように、親台湾派の有力政治家と懇談している。江南事件は、次期総統の座を狙う蔣孝武が日本に滞在中に起きた。日本は蔣孝武が江南事件とのつながりをぼやかす場、アリバイ（不在証明）工作の場として、使用された、と言ってもよい。

### 第 3 節 蔣孝武の総統就任の障害

蔣孝武の政界デビューに向けた活動が活発化していた頃、台湾の政財界を揺るがす事件が起きた。

蔣経国の腹心で実力者の王昇将軍が失脚した。王昇は江西省以来の蔣経国の部下で、40 年

にわたり蔣経国の権力基盤強化に尽力した。王昇は1917年、中国江西省龍南に生まれ、政治工作幹部学校校長、国防部総政治部副主任、主任、国防部総政治作戰部副主任などの要職を歴任した後、蔣経国が総統に就任すると、総政治作戰部主任に昇進、情報治安工作系統を掌握した。

しかし、1983年5月、王昇は主任の地位を解かれ、国防部聯合訓練部主任の閑職に回され、同年9月には駐パラグアイ大使に飛ばされた。王昇は「劉少康弁公室」という、北京の政治攻勢に備えた特別政策小組（メンバーは孫運璿行政院長、蔣彥士・国民党秘書長、宋長志・参謀総長ら党、政府、軍の高官）の取りまとめ役として党務、政務に強力な発言権を持った。1983年4月、王は半ば公式に訪米した。米当局者の一部は王の政治的地位と将来の台湾における彼の役割を考えて彼にてこ入れしようとした。蔣経国は、後継者問題と台湾の外交に影響を及ぼそうとする米国のやり方に激しく反発、王が帰国すると、すぐ「劉少康弁公室」を解散させ、王を左遷した。

また親米派実力者の蔣彥士・国民党秘書長も1985年2月に解任された。蔣彥士は国民党洋務派の代表的人物で、米国との関係も深く、民主政治を標榜し、米国の意見に同調していた。米国は蔣家三代の政権が続くことに反対していた。彥士は蔣孝武という御輿を担ごうとしなかったから、蔣経国の不興を買ったのだった。

江南事件も彥士には話が事前に伝わってなかった。事件後、米国の不信感を解き、蔣孝武への疑惑を解消するために、蔣経国は彥士に影響力を行使するよう求めた。しかし、彥士は婉曲に断った。彥士は江南事件が発生した直後、台湾当局が一切事件に関わっていない、と米国側に断言し、大恥をかいた経緯があり、ピエロの役回りは御免こうむる、との思いがあったであろう。蔣彥士は米ミネソタ大学で博士号を取り、国連で働いた後、台湾で農村復興委員会の秘書長になり、1960年代末、蔣経国に引き抜かれ行政院秘書長に就任。その後、教育部長、総統府秘書長、外交部長を務め、1979年12月には国民党中央委員会秘書長に就任した。蔣経国にとって王昇とともに最も重要な幕僚であった。

蔣経国は蔣彥士の辞職を認め、国策顧問という閑職を与えた。その後任に亜東関係協会駐日代表の馬樹礼をあてた。この人事は蔣孝武をできれば、後継者にしたいという蔣経国の密かな願いが隠されていた。

馬は長期間、インドネシアなど海外で文化宣伝工作（実際は情報活動）に従事してきた。スカルノ時代、ジャカルタで投獄されたのも、情報工作に関わっていたためと見られる。1960年代に国民党中央第三組（海外工作会の前身）の主任となり、日中国交樹立（1972年）後、台湾の在日代表部となった亜東関係協会の駐日代表に1973年就任。馬は日本に赴任した後も、中国広播公司董事長のポストは依然、兼任していた。

蔣孝武は76年から中国広播の主任、80年から総経理に就任している。馬樹礼は蔣孝武の入社を奇貨として、党中央に対して蔣孝武を中央委員に選出するよう提案した。84年に江南事件が起きたとき、馬樹礼は駐日代表で、蔣孝武を日本に招いて、日本の政界に紹介したの

も馬の差し金であることは、ほぼ間違いないだろう。当時、首相だった中曽根康弘まで密かに会見し、蔣孝武は帰国「馬樹礼は大任に耐える人物だ」と父に報告したことだろう。

その功少なからず、というわけで馬は自民党幹事長に匹敵する要職を手に入れた。解任された蔣彦士が蔣孝武の御輿を担がなかったのに対し、馬は積極的に担いだ。この人事に、蔣経国の親心が表れていた。

蔣彦士には追い討ちがかけられた。

1985年2月に暴露された「第十信用金庫（合作社）不正事件」である。蔣彦士はこの事件で訴追された蔡辰洲・理事長（「国泰グループ」8社の董事長，副董事長を兼任）の義父であったからだ。

「国泰蔡家集団」は当時、台湾最大の財閥と言われていた。第十信用金庫は、この国泰グループに属し、グループ内の国泰プラスチック集団に不正融資を続けた。国泰グループの主力企業である国泰プラスチックは業績が悪く粉飾決算が続いていた。同社は年間利益7000万元と発表していたが、実際は45億元（1元は約6円）の赤字を抱えていた。

十信は1979年の業務検査で11億元にのぼる不正融資が財政部によって摘発され、関係者が処罰されている。1985年2月には十信の不正融資額は57億元に達した。財政部は営業停止を命じ、台湾省立合作金庫に業務代行を指示、急場をしのいだ。財政部は不正融資をかねて知っていたのに適切な措置を取らずに放置した、とマスコミは批判した。

不正融資の手口はこうだ。国泰プラスチックの社員が十信の組合員となり、十信から個人向け最高貸出額限度いっぱい融資を受ける。2千数百人の社員が250万元を引き出せば60億元以上になる。国泰は十信本社ビルの中に本社を置いており、融資の審査も当然のことながら甘かった。

十信はもともと台北の地方銀行で、1957年に経営者が死亡したため「国泰蔡家集団」の創始者である蔡万春が引き継ぎ、個人預金の分野で業績をあげ異彩を放った。

蔡がグループを発展させたきっかけは林頂立との出会いである。林は特務機関の軍事統計局アモイ事務所長を務めたことがあり、政界に顔が利いた。蒋介石死後、つなぎ役で総統を務めた嚴家淦とも親しかった。

蔡は政界工作を通じて、「国泰産物保険公司」「国泰信託投資公司」「国泰人寿生命保険公司」という三金融機関の創設を政府に認可してもらった。

蔡はこの四つの金融機関をグループの中核に据え、他の企業を買収し、傘下の企業は80近くになっていった。蔡一族は傘下の金融機関が集めた資金を関係企業に集中的に投資した。資金は株式市場と不動産市場にも投じられ、蔡関係の資金は市場流動性資金総額の4分の1に達した、といわれた。

蔡一族が所有する土地は1980年当時、5000ヘクタールに達していた。

第3段階として、蔡一族は国民党、政府、特殊機関に大量の資金を供与した。蔡一族は政治との結託を深めた。蔡辰洲が国民党に加入したときの紹介者は蔣彦士と王昇だった。当時、

王は国民党秘書長の座を狙うほどの実力者であった。国泰グループは王昇と関係のある特務関係者を大量に採用した。<sup>(注9)</sup>

蔡集団は創始者の万春が中風になってから1979年に五つの集団に分かれた。長男の辰男は「国泰信託集団」を率い、次男の辰洲は「国泰プラスチック集団」を率いた。また万春の弟・万霖は「国泰人壽」のほか建設、病院などの事業を引き継ぎ「霖林グループ」を組織した。

第十信用金庫は「国泰プラスチック」の傘下であり「国泰プラスチック」の放漫経営による破局は十信の取り付け騒ぎに発展した。

蔡（辰男、辰洲）兄弟は信託投資の業務範囲を拡大しようとして、国民党中央常務委員会に持ち込んだ。兄弟の思惑は本格的銀行をグループ内に持ち、王昇と蔣彥士という有力者を通じて、財界を支配する事。王・蔣二人の政治家は政治資金を獲得した。蔡兄弟は王昇と蔣彥士の娘をそれぞれ娶り、両者は親族関係になった。蔡辰洲は二人の後押しで立法委員にも当選した。

蔡兄弟の野望は、俞国華（元中央銀行総裁で行政院長）が支配する金融界の覇者になることであった。しかし、その野望は、俞ら「銀行派」によって潰された。蔡辰洲は不定期信託資金を信託投資公司が取り込めるよう運動し、蔣彥士は党中央常務委員会で全面的に支持したが、俞国華らの反対で否決された。俞と蔣の対立の溝が深まったのはこのときからだという。

蔡兄弟は華僑銀行と台南中小企業銀行の乗っ取りを図ったが、これも失敗している。

第十信用金庫は1985年2月の時点で、融資総額は150億元、そのうち70億元以上が関連会社向け融資だった。

第十信用金庫（合作社）をめぐる金融不正事件は1985年6月、蔡辰洲ら87人が背任、私文書偽造などの罪で起訴された。蔡と国際海運・元董事長、蕭政之が同月、手形法違反の罪で有罪判決を受け、党籍を剥奪された。

こうしたスキャンダルにもかかわらず、後に蔡兄弟の叔父・万霖が経営する国泰人壽保険は台湾最大の企業になった。<sup>(注10)</sup>

王昇と蔣彥士の失脚は、この金融スキャンダルに関与したからだけではない。彼らが、新興勢力と結んで蔣王朝に挑んだからではないか。特に蔣彥士は蔣孝武の政界進出に非協力的であったことも、更迭の原因となったのではないか。

党国体制の当時の台湾で起きた金融不正事件は、端なくも政官財の癒着を白日の下にさらした。

#### 第4節 江南は国民党軍の少年兵だった

蔣経国の後継者は誰か、政局の焦点は、この一点に絞られていた。そのとき、起きたのが、江南事件である。江南は、この政治的動向にどうかかわりあっていたのか。

江南は1932年12月7日、江蘇省靖江県の地主の子として生まれた。江南の父は1942年の冬の朝、家を出た直後、何者かに射殺された。長男である江南が見たのは凍てついた路上に



横たわった父の遺体だった。弾丸は頭部に撃ち込まれていた。父の死後、江南の生家は没落した。父の死後、祖父の厳格な教育を受けた江南は1948年、母に別れを告げて蘇州に行き、国民党の軍隊に少年兵として入隊した。

戦局は既に国民党の負け戦。江南は敗走する国民党軍とともに、蘇州から上海に逃げ込み、そこから他の兵隊と共に台湾へ向かった。台湾に来た江南は空軍に入隊し、志願して政治工作幹部学校に入校した。

しかし、政治工作というのは特務工作、情報工作、スパイ工作と言い換えてもいい。江南の体質に合わなかったようだ。退学処分になるよう取えて振る舞って、退学させられると、そのまま行方をくらませてしまった。

江南の才能を惜しんだ友人たちは自首を勧めた。軍法務当局は1954年、自首した江南に対して軍籍を剥奪し、執行猶予つきながら2年6月の有罪判決を言い渡した。江南は、その後、結婚し子供までもうけながら離婚し、30歳になって、崔蓉芝と出会った。国立政治大学の学生であった崔は若く美しかった。彼女は江南に大学進学を熱心に勧めた。台湾を出る決意を固めていた江南は英語を独習し、崔の助けを得て師範大学の夜学を終え、創立間もない台湾日報に入社した。

ベトナム特派員となった江南は、流麗、迫真の筆致で読者を魅了した。1967年ワシントン特派員として渡米した。この年、崔と正式に結婚、新婦と子供を連れて勇躍、米国に赴いた。

特派員とはいえ、江南の月給は安く、入学したアメリカン大学（首都ワシントン）も名門校とはいえ、米国生活のスタートは必ずしもバラ色とはいえなかった。

しかし30歳を過ぎてようやく訪れた青春の日々を一気に燃焼するかのよう、江南は台湾から訪れた政治家、学者、留学生へ積極的に取材攻勢をかけ、当時の駐米大使・沈劍虹以下、台湾の在米官僚は江南の筆を恐れた。後に新聞局長、台湾省長、総統候補となった宋楚瑜もこの頃、足繁く江南の家を訪れたという。その宋は前述したように、江南の「処刑」を決定した党軍政の三者連絡会議に党文化工作会主任として出席している。

1978年、既に台湾日報ワシントン特派員を辞めてフリーランサーになっていた江南は居をサンフランシスコに移し陶器の販売を副業として始めた。サンフランシスコで江南の交友範囲は広がり、台湾から来た作家や中国の知識人など雪だるまのように知人の輪は広がった。江南の在米時代の活動を知る友人によると、江南はいたずら好きの稚気愛すべき人物、として振舞っていたようだ。

「お嬢さん、あなたが大変美しいので、友人が是非、お食事にお誘いしたいと言っていますが、いかがでしょう」と見ず知らずの女性に、話し掛け、相手の女性が赤くなるのを見て喜んだり、繁盛しているレストランに入りきれない客が列を作って待っていると「本日休業」の札を店内から持ち出してかけて、逃げるなどして、友人を笑わせたりしていた。

江南の人生には、こうしたいたずら心が入り込んでいたかもしれない。江南は軍の特務機関員養成機関に在籍し台湾当局から金銭をもらって「蔣経国伝」の内容を書き換えておきな

がら、その後で蔣家の暗部を暴く「呉国楨伝」を執筆しようとした。この行為は、少なくとも蔣家とその忠臣にとって、許されざる反逆行為であった。

江南は国民党の情報機関に密かに情報を送り、「蔣経国伝」の内容を改訂版で書き改めるよう求めた国民党当局の要求を受け入れた。その代償に、金銭を受け取っていたことが江南自筆の手紙や夫人の証言で死後、判明している。

1975年に初版が出版された江南の「蔣経国伝」は国民党と蔣家にとって見過ごせない蔣家批判書であった。台湾において、蔣経国は尊敬の対象であっても、政治学の対象であってはならなかった。国民党が執拗に書き直しを江南に求めたのは、政治家・蔣経国の神秘性が喪失し、批判対象となることによって蔣孝武への政権委譲の道が閉ざされることを恐れたからではないか。台湾の最大の保護者は米国であり、台湾の政治は米国の保護を求める一方、その内政干渉をいかに排除するかは歴史でもあった。蔣経国に対抗するのに、米国の力を利用しようとした点では呉国楨も江南も蔣家にとっては「同罪」であったのであろう。

江南はワシントン特派員として米国流の報道に慣れていた。米国の大学で政治学のイロハを学び、一般人が入手できない若干の内部資料も手元にあったであろう。事実、「蔣経国伝」は豊富な資料に裏づけられ、掘り下げた内容で、江南ならではの著作、と華人世界で話題となり、中国からも評価された。江南未亡人によると、書き直しを受け入れた江南は2万米ドル（当時のレートで日本円にして500万円）を台湾当局から受け取ることで合意し、そのうち1万7000ドルを生前、受け取っていた。

江南は殺害される1カ月前の1984年9月、中国を旅行し、香港の「90年代」11月号に絶筆となった旅行記を発表している。その一方、江南は台湾の軍情報局に大陸の内情をつぶさに報告している。そこには、「葉剣英が香山で療養中だが、重体で、死期が近い」といった内容のものから大陸で会った要人名、大陸における台湾関連情報が手短かに報告されていた。

香港の雑誌に1984年2月から10月まで江南が台湾の情報機関に充てた手紙7通の内容が報道された。その内容は、米国における中国共産党の活動、その台湾統一工作、台湾独立派の人事動静、中国の国内情勢、軍事情勢などについて江南の自身の分析と意見が添えられていた。この7通の手紙の中で、江南は「蔣経国伝」の手直しに同意すると共に、台湾当局への忠誠を誓った。その中の1通（2月6日付け）で江南は「私は蔣総統が1978年から今日まで、国民党の過去の汚点を大部分洗い流し、これは凡人にできることではない、と内心感じている」と述べている。

一方、汪情報局長は、江南が二重スパイで中国にも情報を流し、中国での国民党スパイ組織が破壊された、と主張している。また、米FBIに情報を流していたという。<sup>(註11)</sup>

江南は1981年、82年、84年の3回訪中している。中国では鄧力群・党宣伝部長ら要人と会見している。また崔陳（陣）という中国民航職員と米国で2年以上にわたって付き合い、情報源としていた。崔が1984年12月の人民日報に連載した「江南先生印象記」によると、江南は中国のサンフランシスコ総領事館の館員に週末2時間、米国の政治、歴史、経済、地

理，風俗について講義をし，さらにジョージア州まで足を伸ばして呉国楨を訪ね，呉に中国を訪問するよう説得，訪中する段取りをした，という。<sup>(註12)</sup>

台湾当局からすれば，江南の行動は米国，中国，台湾の情報戦争の最前線で動く手駒でありながら，相手側に取り込まれる心配がある存在，要注意人物であったのであろう。江南がサンフランシスコで経営する土産物屋は，一つ10ドル前後の品物が日に十数個売れるのがせいぜいで，生活は楽でなかった。江南自身，米国で，文筆で生計を立てる難しさを香港の雑誌記者に生前，しみじみと語っていたことでも，それは分かる。江南自身，海水と淡水が入り交じる汽水を泳ぐ「ボラ」のようにしたたかに生きているうちに，自分が忠誠を尽くす対象について明確ではなくなっていた，かもしれない。

江南の台湾への忠誠心の揺らぎをうかがわせる一つのエピソードがある。

1969年，ワシントンのアメリカン大学で東南アジア政治を研究中，江南は台北に里帰りした。台北で警備総司令部勤務の知人と会ったとき「ワシントンの大使館から君にとってまずい報告が上がって来ているぞ」とささやかれた。驚いた江南は翌朝，台北を離れた。「飛行機が上空に達したとき，本当にホットした」と後日，周囲に漏らした。江南の脇の甘さを物語るエピソードであると同時に，この頃から，国民党への忠誠心は薄らいでいったかもしれない。

江南は「蔣経国伝」（1984年版）の中で「蔣経国政権に成績を付けるならば，経済はAプラスで政治はB」との評価を下している。<sup>(註13)</sup>

「経済の飛躍は政治の開明と進歩を後押しするものだ。それは西側の民主主義の尺度からすると，不十分ではあるが，過酷な権力支配の従来の台湾政治からすれば，大幅に改善されたといえる」と述べ，次のように具体的に改善された点を挙げた。

国民党が反体制派に対して，厳しい取調べによる厳罰主義（10—15年という長期の懲役刑や緑島などへの島流し）から，高雄事件（美麗島事件）以後，変化し，許信良など一部の政治犯を赦している。

第2に出入国制限を徐々に緩和した。

第3に新聞や雑誌の発行停止など依然，続いているが，言論の自由は緩和している。

第4に，これまでの選挙には不正が付き物であったが，中壢事件以後，改善がみられる。

第5に，国民党自身が極端分子（強権派）を切った。総政治作戰部主任だった王昇は40年蔣経国に仕えてきたが，蔣は後継者が韓国の全斗煥的強権政治が出現するのを嫌って，左遷した。

国民党政権への採点の甘さがむしろ，目立つ内容だが，（第5点の）王昇解任の下りなどは，蔣孝武への政権委譲を見透かしたかのような内容で，蔣家側とすれば「嫌味」な指摘である。王昇が主任をしていた国防部総政治作戰部は特務機関の中で最も重要な機関の一つだ。総政治作戰部は政治将校を全軍に配置し，軍隊を監視している特務機関である。党，軍，政府，特務機関の四つを掌握しなければ，台湾で支配権を確立できない。特に特務機関を握らなければ，他の部門を支配できない。王が失脚した真の原因は特務系統を完全に牛耳ってい

たからであり、この公然の秘密を江南は明らかにした。<sup>(注14)</sup>

#### 第5節 軍統という名の治安組織

国民党の数ある特務機関の中で最も著名な組織は、国民政府軍事委員会調査統計局であった。略称「軍統」。前身は「中華復興社」(別名、藍衣社)である。別名「力行社」といい、1932年3月設立された。社長には蒋介石が自ら就任、その下に組織処、宣伝処、訓練処、特務処の4部門があり、特務処の処長は後に特務のボスとして有名になる戴笠であった。<sup>(注15)</sup>

中華復興社特務処が正式に設立されたのは同年4月1日で、前身は国民政府軍事委員会密査組だ。密査組は初め十数人の陣容だったが、特務処になってからは100人以上に拡充され、その後さらに1000人近くまで膨れあがり、テロ活動などで猛威をふるった。特務処は非公然組織で、対象者の逮捕など公然活動をする上で、なにかと不便だった。

そこで1932年9月、蒋介石は戴に軍事委員会調査統計局第2処処長を兼任させた。これによって、戴は公然と特務活動を拡大できるようになった。

1934年7月、蒋介石は戴を軍事委員会南昌行営調査課課長に任命、同調査課に勤務する特務工作員も戴の指揮する特務処に吸収された。

日華事変後の1938年3月、武昌の珞珈山で開いた国民党臨時全国大会で、蒋介石は中央執行委員会調査統計局(中統)を増設すると共に、軍統を取り仕切る実際の責任者に戴を抜てきした。

戴は党歴が浅い上に黄埔軍官学校での卒業年次が第6期と浅く、先輩のそねみを買う恐れがあったため、敢えて軍統局長とはせず、副局長という事にし、軍統局長は蒋介石侍従室第1処主任が兼任する形をとった。このため、歴代局長は軍統の仕事、人事、経理に口出しすることはなく、戴が取り仕切り、蒋介石に直接報告した。それまで、軍統の局長は、四大家族の一つである浙江財閥の巨頭で反共テロ集団CC団のボスであった陳立夫が局長を務めていた。

戴は「上海の地下市長」の異名を持つ杜月笙が率いる青幫を利用し、その勢力拡大を助けた。ヤクザ組織である青幫は共産党員や対日協力者を対象にしたテロ活動に軍統の手足となって働いた。<sup>(注16)</sup>

目の前に日本軍が立ちほだかり、背後を共産党の紅軍に脅かされた国民党を支えたのは、この青幫であった。

杜は配下の組員1万人からなる「忠義救国軍」を組織した。また「上海工作統一委員会」「軍統局上海弁事処」を設立し、漢奸へのテロ活動を強化した。

その代表例は親日政権であった汪兆銘政権要人に対するテロ活動で、杜によって非業の死を遂げた「漢奸」は300人以上に上った。

日本軍に取りいった大物弁護士の范剛は、上海威海衛路の自宅前路上で自動車から降り立ったところを狙い撃ちされた。また繁華街で宴会中に襲われ、機関銃掃射で惨殺された漢奸も

少なくなかった。また共産党員の弾圧も容赦なかった。仮借ない戴笠のやり方は、西側教育を受けた知識人も共産党の側に追いやる結果を招いた。

国民党とヤクザ組織との強固な結びつきは、国民党内部に金属腐食に似た現象を招いた。杜を頂点とする幫会の頭目は特権階級となり、第1回国民代表大会で杜の息のかかった人物が、上海地区代表15人のうち13人を占め、上海市の監察委員会には陶百川、楊虎の2人の手下を委員として送り込んだ。ヤクザが公安委員を兼任するという珍しい事態が生じたのだ。杜は経済人としても上海を代表する財界人として、扱われた。

地下の非合法経済活動を一手に引き受けただけでなく、金融活動全般が杜の縄張り（シマ）となった。杜の子分が経営する中国通商銀行が破産の危機に直面したとき、杜は国民党中央に働きかけて、中央銀行の業務局長を総経理に据え、必要な資金を中央銀行に融資してもらう荒業をやったのけた。新聞界も電話一本で意のままになった。警備総司令は子分の楊虎、軍法処（裁判所）はやはり子分の陶百川（後に陸京士）で、杜が犯人をでっち上げ、重罪に処すことも可能になった。

一方、戴笠は軍統を支配下に置くと、特務処時代の副処長の鄭介民を軍統主任秘書に任命、情報、行動、司法、電信、総務の各科を処に昇格させた。国民政府は1937年の日華事変勃発によって武漢から重慶に諸機関が移転したが、軍統は拡充され、1942年、情報処は第1処、第2処に分離された。第1処は軍事情報の管理、第2処は党と政府の情報の管理に当たった。第3処は実行行為の実際活動、第4処は電信関係、第5処は司法、第6処は人事、第7処は会計、第8処は総務をそれぞれ任せた。

このほか、訓練処、警務処、被占領地区での工作を担当する布置処、懲戒委員会、考課委員会などの部門があった。対日戦勝利後は財産清算整理委員会も成立した。

これとは別に、共産党を裏切って国民党に投降した張国燾（中共創立者の1人）が主宰する「特殊政治問題研究室」、また殺人、放火、破壊工作、毒物の製造など「特殊技術」の研究に取り組んだ「特殊技術研究室」、経済情報科が拡大した経済研究室、文化娯楽活動の管理を担当した「中山室」などがあった。

武装特務隊は当初の大隊規模から特務団に発展、汽車（自動車）隊も汽車大隊へと規模を拡大した。戴笠は特務機関の規模は大きい程良いと考えていたので、様々な名称を持った特務訓練班だけで40以上あり、内勤者が1400人もいて、その多くは重慶の羅家湾にある軍統本部と磁器口郷下弁事処に集中していた。

軍統は最盛期、内外勤合わせて5万人が勤務し、国内には区、ステーション、組の単位と、爆破、破壊、行動などの総隊、大隊を設けたほか、国外にも多くのステーション、組、通信員を設置して行動拠点、連絡所とした。通常、1人の外勤特務工作員は数人から数十人の配下、協力者を持つため、これらの非専属協力者を含めると、いかに軍統が大きな情報機関であったか想像できる。

蒋介石は共産党対策として、1942年に米国の協力を得て中米合作所を重慶の郊外に開設し

た。中米合作所は特務工作員の訓練をする練兵場、教室の他に共産黨員、左傾知識人を収容する監獄もあった。米国の情報部員が米国式スパイ教育を国民党特務に施した。監獄は中米合作所が設立される3年前に建設されていた。同合作所が設立されてから歌樂山一帯に20余の牢獄が増設された。それらは「白公館」「渣滓洞」といった名称で呼ばれ、この白公館と渣滓洞では新四軍軍長の葉挺や西安事件で蒋介石を監禁し、後に逮捕された抗日愛国將軍の楊虎城などが監禁されていた。

1949年11月27日、国民党は大陸から台湾に退去する直前、獄中にいた300人あまりの共産黨員、反国民党人士を虐殺した。世に言う「11・27大血案」で、中米合作所跡は「中米合作所集中營（キャンプ）蔣米罪行展覽館」と名づけて記念館に解放後になった。

日本が降伏した翌年の1946年3月17日、戴笠は搭乗機が南京に近い江寧県板橋鎮戴山に衝突、死亡した。蒋介石は軍統局長に鄭介民、同副局長に毛人鳳を起用した。軍統はどれほど経費を使っているのか、だれも見当がつかないほど肥大化していた。戴笠の私兵的色彩が濃厚となっていた肥大した組織の縮小が後任者の急務となった。

1946年、国民党軍事委員会は国防部に改組され、軍統も国防部保密局と名を改めた。保密局の成立は10月1日で、当時、国防部第2庁長鄭介民が局長を兼ね、前軍統主任秘書の毛人鳳が副局長に就任した。

## 第6節 特務工作の再建

蒋介石は台湾撤収後、情報工作部門の再建に着手した。情報部門の弱さと宣伝活動のまずさが、大陸失陥を招いた一因と感じたのであろう。

1949年7月、蒋介石は各特務機関の責任者を高雄へ集め「政治行動委員会」という統一情報組織の設立を決めた。

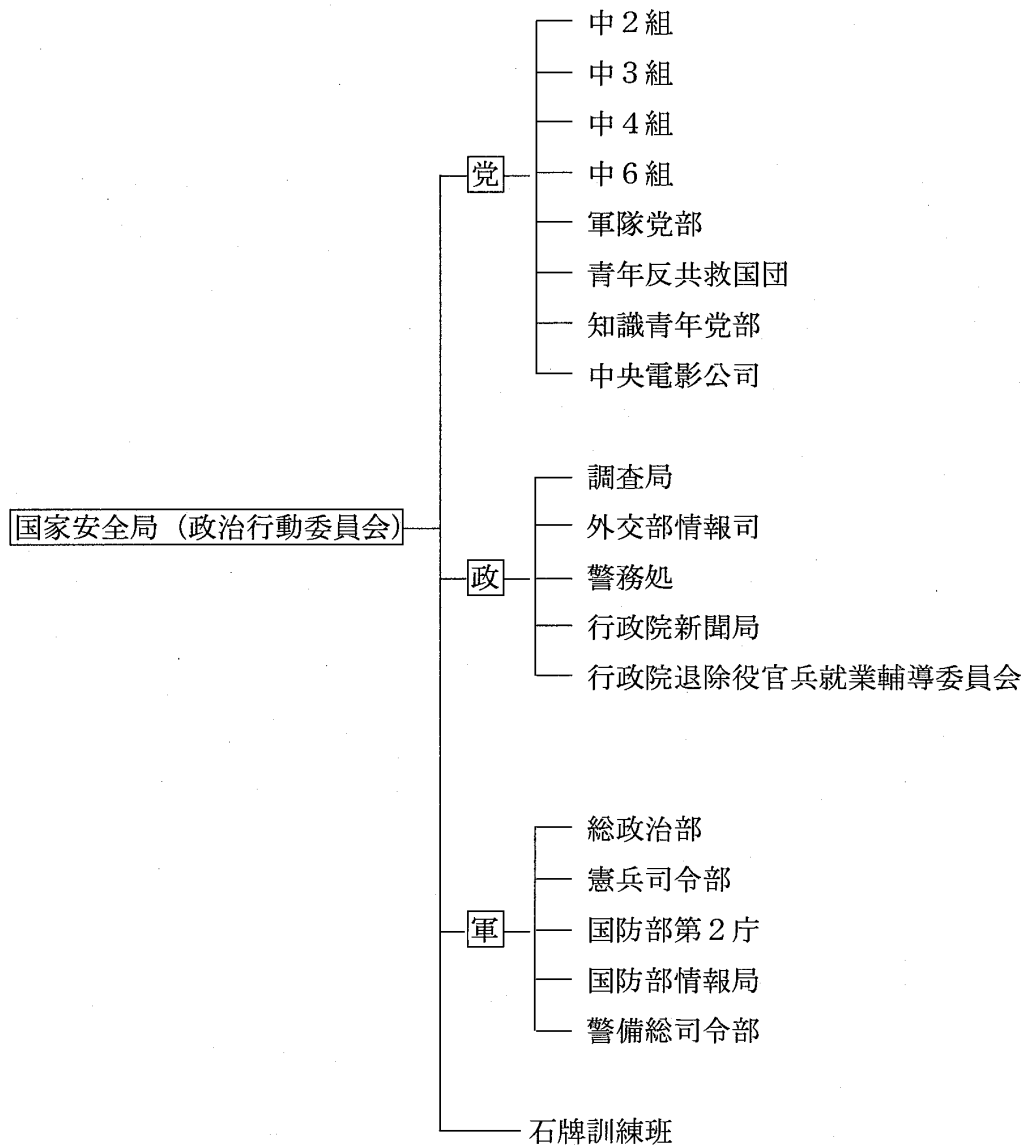
委員には蔣経国、唐縱、鄭介民、毛人鳳など10人が任命され、唐が幹事役を務めることになった。この委員会の基本任務は、それまでばらばらだった情報を体系化して集中し、判断を容易にし、また情報収集能力を高めることであった。

政治行動委員会は8月20日、台北の円山で正式に発足した。台湾最高の情報機関「国家安全局」の裏機関であった。<sup>(注17)</sup>

委員会の実権は唐縱から徐々に蔣経国に移り、政治行動委員会は「總統府機要室資料組」をも支配した。政治行動委員会の影響力は党と行政機構だけでなく、軍、教育、財界をもその支配下に置くまでに発展した。同委員会は事実上「政府の中の政府」の様相を帯びた。政府である行政院は国民党の意向に従い、国民党は總統で党主席である蒋介石の意向に従う。總統府機要室資料組と国家安全局の二つの外套をまとう政治行動委員会が実権を掌握した。蔣経国は国民党中央党部第6組「中6組」の「保防工作」を利用し、各党小組に「保防幹事」を置き、各黨員の行動をチェックし、また政府の「調査局」、党所属「知識青年党部」、「青年反共救国団」の各級組織を通じて公務員、学生を監視、また憲兵、諜報参謀が軍人を監視す

る体制を取った。

表 1



国家安全会議が設置されるのは 1967 年 2 月 1 日である。蔣孝武が執行秘書を務めていたといわれる国家安全会議の主席は、総統で、総統が出席できないときは副総統が代理を務める。会議の出席者は副総統、総統府秘書長、参軍長、総統府戦略顧問委员会主任、同副主任、行政院長、同副院長、国防部長、外交部長、財政部長、経済部長、参謀総長、国家安全会議秘書長、他に総統が指名した人物も出席できる。

国家安全会議は必要に応じて、特別会議を招集し、前記の人物以外に立法院長、司法院長、考試院長、監察院長なども、これに出席させる。同会議の下に、国家建設計画委員会、国家

安全局、国家総動員委員会、戦地政務委員会、科学発展指導委員会などの機構が設置された。国家総動員委員会の主任委員は蔣経国、副主任委員に馬紀壯、蕭毅肅が就任している。国家安全会議は国防会議を再編した機構である。国防会議は1954年に設置され、主席は蒋介石、秘書長は初代が張群、その後が顧祝同。実権は副秘書長の蔣経国が握っていた。米国の国家安全保障会議 (National Security Council) を真似て創設され、その任務は「政略の協調、国防政策と国家総動員の審議、軍事計画と行政各部門の配合」とされていた。

国家安全会議は国防会議を継承することによって国防会議に付設していた国家安全局 (政治行動委員会の表組織) を吸収した。国防会議は国家安全会議創設によって廃止された。

1985年当時、国家安全会議の主席は蔣経国、秘書長は蔣緯国、下部機構の国家建設研究委員会の主任委員は周至桑、政治組幹事 (召集人) 連震東、軍事組幹事、頼名湯、経済組幹事、張世光、文化組幹事、劉真、科学発展指導委员会主任委員、呉大猷、国家安全局局長は汪敬煦、戦略顧問に何応欣、顧祝同ら28人が名を連ねている。

蔣経国はギルド的体質を色濃く残していた特務機関を近代化することを目標とした。蔣経国は軍事、政治、党務、情報、公安、生産、流通、出入国、貿易、学生運動、青年活動、大衆工作の各分野に覆面工作員を配した。

具体的には台湾省民衆服務社、各企業、学校の安全室も特務機関に関係していた。蔣経国はこの特務組織を背景に、国防最高会議秘書長、国防部長、国民党中央常務委員、国家安全会議国家総動員委员会主任、行政院長、総統へと上り詰めた。

国民党が支配する八大情報機関とは、行政院法務部調査局、国防部情報局、警備総司令部、総政治作戰部、憲兵司令部、警政処、中央党部、国家安全局であり、国家安全会議がこれらの情報機関を統括している。

## 第7節 国民党と幫会の深い関係

蒋介石は暴力団組織である幫会を利用して反対派を抹殺した。江南事件を考えると、蔣孝武、孝勇兄弟が特務機関を通じて竹聯幫というやくざに邪魔者を殺させるという、手口は驚くほど似ている。

国民党と秘密結社は密接な関係を持っていた。1894年2月、国民党の前身である興中会がホノルルで結成されたとき、メンバーの3分の2は洪門という秘密結社の関係者で、孫文も洪門に加盟していた。

洪門は清の時代、明の遺臣や農民が「反清復明」の政治スローガンの下に結成した清朝に対する抵抗組織である。洪門は時代が降るにつれ、非合法暴力組織としての色彩が濃厚になった。清末に労働力として海外に進出した中国人の多くは、母国にも、また移住先の国にも保護を期待できなかった。

「清国人」であるが故の迫害の迫害に耐えなければならなかった彼らを支えた組織は、出身地を同じくする者の同郷会、血縁関係さらには、血盟によって結ばれた秘密結社である。



迫害に対抗するために、こうした秘密結社は有効であった。力弱き者は異郷の脱落者にならざるを得ないことを華僑自身が最もよく知っていた。法律は弱者のためにあるのではなく、強者の権利を保護するものであるという冷徹な事実を異郷で思い知らされた華僑の多くが秘密結社と関係を持っていたのは当然なことであろう。

この洪門を孫文は革命の後ろ盾にしようと考えた。海外華僑に影響力を持つ洪門は国民革命に資金と人材を提供した。政治結社と宗教団体が一緒になったような洪門は、いくつもの幫からなり、その一つが青幫である。

青幫は清代に揚子江一帯の水運業者の組合を基に成立、江蘇、安徽、浙江の三省でアヘンを密売、賭博に手を出し、国民政府成立後は浙江財閥と結び一大勢力にのし上がった。

蒋介石はこの青幫の総帥、杜月笙と結び、その勢力を利用し各地の軍閥討伐や党内の反対勢力肅正に当たらせ、さらに青幫を反日、反共活動の有力手段とした。

杜月笙は1988年8月22日、上海浦東高橋鎮の商家に生まれた。幼くして父母を失い、博打好きのため父の残したわずかな財産も使い果たし養家の金に手を出したため、追い出され、上海で流浪の生活をしていた。

その頃、青幫のヤクザ陳世昌と知り合い子分となった。1911年に麻薬取引組織の「八股党」に入った。

当時、フランス租界の督察長は上海きってのやくざの頭目であった黄金榮で、杜は黄に接近した。黄の紹介で上海最大のアヘン商と関係をつけ、アヘン売買に携わる傍ら手下を増やし、力で黄浦江埠頭一帯の顔役にのし上がった。杜は親分の黄金榮が軍閥、盧永祥の息子・小嘉に監禁された際、釈放に尽力し、黄はその恩義に感謝し、兄弟分となった。

1925年、杜は黄らとフランスの駐上海総領事の発案で、潮州（広東省）系の麻薬商と組んで「三鑫公司」という麻薬販売組織を設立した。これはフランス租界に巨額の利益をもたらした。この功で杜月笙はフランス租界商会総連合会主席兼納税華人会監察の要職に就いた。

1927年4月12日、蒋介石が反共クーデター（4・12反革命クーデター）を起こし国民党内の左翼分子を追放した。杜はその前、黄らと上海のヤクザを糾合し「中華共進会」を結成した。蒋介石は中華共進会に資金や武器を提供するとともに、王栢齡、楊虎、陳群ら部下に手助けさせた。

杜は4月11日、上海市総工会委員長、王寿華を殺害した。それから1937年の日華事変に至る10年間に多数の左派人士、共産党員を殺害した。蒋介石は反共クーデターの後、武漢政府に対抗して南京に国民政府を樹立した。日華事変まで杜はフランス租界でスト破りを指揮し、租界内で賭博場やモルヒネ製造工場を経営した。1929年、中匯銀行を設立し理事長に就任した。

1932年、杜は①徳を積み②社会に奉仕し③国家に忠誠を尽くすことを目的とすると称した「恒社」という右翼団体を設立、

労働組合の内部に幫会に似た組織である「毅社」「心社」「暢社」「明社」を設立、「労働者

武装遊撃隊」を組織して、憲兵、警察、特務機関に人を送り込んで労働者や学生の逮捕に当たらせた。

1933年、蒋介石は内戦の費用調達のため、「航空公路建設奨励券」を発行、杜は戴笠と組んで「大運公司」を設立し奨励券を販売し、特務活動の資金に充当した。

1934年11月「上海市地方協会」の会長が特務に暗殺された後、その会長に就任、また中国紅十字会副会長に就任した。1935年4月には中国通商銀行の董事長に就任した。

1936年12月に西安事件が発生すると、杜は上海市地方協会の名で張学良に打電し、蒋介石の助命を嘆願した。

1937年7月7日の盧溝橋事件による日華事変発生後、杜は上海の「地下市長」格となり、当時の呉鉄城市長は手に余る問題が発生すると、杜の力を借りた。上海の五大争議も杜が仲裁し收拾した。当時、上海で成立した抗日救国総会も杜が黒幕で、抗日ストや抗日救国募金運動も杜が背後で演出した。

1937年11月、上海が陥落。杜は12月、武漢で蒋介石と会見した後、香港に出て、特務活動と麻薬売買に従事した。

1939年夏、国民党地下組織再建のために「上海党政統一委員会」を設立、杜は主任委員に就任した。その冬、戴笠に重慶へ呼ばれ、各地の親分衆の取りまとめを依頼された。それを受けて杜は「人民行動委員会」を設立した。

1941年冬、香港が陥落したため、杜は住居を重慶に移し、杜の私設組織「恒社」本社を設置、中国西南部の各重要都市に支社を置いた。

1942年3月、杜は重慶に「中華実業信託公司」を設立、董事長に就任した。杜はこの会社を使って国内各地に物資を運び巨利を得た。輸送、検査の両面で杜の事業は優遇されていたから、他の業者は太刀打ちできず「国難に乗じて財をなした」と陰口を叩かれた。またこの頃、重慶に移った中国通商銀行総経理（頭取）も兼ね、成都、成安、洛陽、蘭州など各地に支店を開設し、各支店内に「恒社」支局を置いた。

杜は1943年戴笠と重慶に「通済公司」を設立、日本軍の息のかかった「民華公司」と物資交換も行い、日本軍と経済的関係を持っていただけでなく、蒋介石と日本側をつなぐ数少ないパイプ役と目された。

1945年日本が無条件降伏した。その年の9月、杜は上海に戻った。杜は「恒社」の組織を全国20以上の都市に設立、金融、商業、工業、の各界での勢力を広げ、肩書きは董事長だけで70余り、董事など役員を入れると200以上になった。

上海市参議会も支配していた。10月に「人民行動委員会」を保密局幹部の鄭介民の意向で「中国新社会事業建設協会」に名前を変え、常務理事に就任した。

この組織は特務機関の手足であり、カモフラージュの役割も果たし、共産党の情報を収集し党員を逮捕した。

1948年、杜は国民党大会上海代表となった。米国に上海の「国際管理化」を働きかけたが、

実現する前に、人民解放軍が南京を解放、1949年4月、杜は香港に逃亡した。1951年8月16日、香港で病死した。

## 第2章 蔣孝武の挫折

### 第1節 急成長した戦後の台湾経済

台湾は九州よりも小さい面積3万6190平方キロの島国である。そこに2207万（1999年）もの人が住み、人口密度は常に世界1、2位であった。1人当たりの国民所得は1万3203ドル（99年）で、大陸との生活格差は広がりつづけてきた。

台湾は1950年代に平均8.2%の経済成長を遂げた。60年代に9.1%、70年代10.1%と高度成長を続けた。江南事件が発生する前の1983年は7.9%、84年は10.9%だった。台湾の発展ぶりは、戦後日本の高度成長を彷彿させた。世界第11位の輸出国となり「第2の日本」という意味で「リトル・ドラゴン（小龍）」と欧米から称された。1988年には外貨保有高が日本に次ぎ世界第2位に躍り出た。

日本が降伏した当時の台湾の人口は609万であったが、中国大陆から戦後、国民党軍とともに200万近い外省人が移住してきた。1958年には総人口が1000万を突破し、1972年に1500万、1983年当時1879万、人口密度は1平方キロ当たり512人で、バングラデシュに次いで世界第2位の過密国家であった。ちなみに日本は同316人（84年）だった。

とにかく台湾では、1時間に48人の赤ん坊が産声をあげ、毎年、35万規模の都市（当時の基隆市など）が一つ生まれる勢いで人口が増え続けた。

人口の急増で食糧供給が不足した。1980年当時、小麦は3000トンの生産に対し、消費量は69万トン、大豆は26000トンの生産に対し同97万トンで、総合的な食糧自給率は60%に下がった。交通も大都市、特に人口が集中している台北の交通が渋滞し、早朝から深夜まで、切れ目ないラッシュが続いていた。

1970年から79年までに1000人当たりの自動車保有数は6台から32台へ、オートバイは同44台から190台へと急増した。人口の急増は住宅、エネルギー消費、厚生面のいずれをとっても台湾経済に重荷となった。国家財政は国防費が予算全体の50%を超える年もあったほどで、中国の軍事的重圧（「台湾解放」）が国家財政にのしかかっていた。

石炭を除けばエネルギー源も皆無に近いといった多くのハンディキャップを克服し、台湾が経済を発展させた原因はなにか。

勤勉な国民性、高い教育水準、農作物の生育に適した温暖な気候、農地解放、米国援助の有効活用、感慨設備など日本時代に整備された経済基盤や日本から接收した約100億円（当時のレート、日本の国家予算の5%に相当）にのぼる日本国の資産及び日本人の私有財産<sup>(注18)</sup>の存在など、列挙できる。それに加えて、国民党政府が政治と経済の両面において、着実な成長政策を採った点が好作用をもたらしたことは見落とせない。大陸の大舞台で数多くの困難な条件の下で、必死に経済運営に取り組み成功に至らなかったものの、その失敗の教訓を

日本の九州ほどの島に生かしたのである。

まず国民の所得格差が縮小された。世界銀行によると、台湾の最高所得家庭（五分位階層の最高所得層）と最低所得家庭（同最低所得層）との収入比率は、1952年に15対1であったのが、1976年以降は、ほぼ4対1にまで縮小した。

第二に、農業国から工業国へと経済構造が変わった。1951年の台湾の国民総生産（GNP）の中で35.3%が農業生産によるもので、工業生産の比率は19.4%に過ぎなかったが、83年になると、農業生産の対GNP比率は7.4%であるのに対して、工業生産は49.8%に増えている。工業化を可能にしたのが良質の人的資源である。1952年当時、国民のうち小学校教育修了者は43.5%、中等教育修了者8.8%、高等教育修了者1.4%だった。識字率という点でいえば、非識字者は42.1%（52年）から9.6%（82年）に減少した。30年間に人口は3倍に増えたにもかかわらず、初等教育修了者40.9%、中等教育修了者39.2%、高等教育修了者8%に達した。

第三に貯蓄率が高く、その資金が産業投資に回された。1980年代において、台湾の貯蓄総額がGNPに占める比率は毎年30%を超え、世界最高水準にあった。

台湾はこうした優位性を活用し、農業生産の利益を労働集約型の軽工業に投入し、1970年代末から経済戦略の目標を技術集約型の機械工業と情報技術（IT）産業に移した。政府は先を急がず着実な発展政策を採り、経済基盤の拡充に努めた。

1973年、第一次石油ショックが台湾を襲った際、積極財政に転じ、十大建設（プロジェクト）に着手した。

予算総額60億ドルの十大建設は①南北縦貫高速道路（基隆—鳳山間373キロ）②台中新港③北周り鉄道④蘇澳港建設⑤石油化学工業（中国石油公司）⑥一貫製鉄設備（中国鋼鐵公司年産150万トン）⑦造船所（中国造船公司の100万トン・ドックなど）⑧鉄道電化（基隆—高雄）⑨桃園新空港⑩原子力発電所（台湾電力公司）一の建設計画で、79年央に全プロジェクトが完成した。第二次石油ショックが始まる前年の1978年からは9カ年計画で「12項目建設」を開始した。それは①台湾環島鉄道網②東西横断道路の新設③南北高速道路の延長④一貫製鉄設備の拡充⑤台中新港⑥原子力発電所の増設⑦ニュータウン開発⑧農業用水路の改善⑨防波堤と堤防の改修⑩屏東—鶯鑾鼻道路の拡幅⑪農業機械化⑫文化センター建設、である。

台湾は1972年までの20年間に第1期（53年から）—第5期の4カ年計画を実施した。73年から第6期4カ年計画に入ったが、石油危機など内外情勢の急変で、75年末に中止した。このため第6期4カ年計画に代わり、74年からは十大建設が始まった。76年からは石油危機対策を組み込んだ経済建設6カ年計画が実施された。歴代の「4カ年計画」は台湾の経済復興に大きな役割を果たし、1961年から72年の12年間の経済成長率は年平均9.5%に達した。

政府は80年3月「経済建設10カ年計画」（1980年—89年）を発表した。同計画は経済成長率を年平均7.9%、一人当たりのGDPを最終年度の89年には6107ドルにもっていこうと

する野心的計画だった。

こうした先見性のある経済政策は、台湾が困難な条件を跳ね返して経済を発展させた要因の一つであった。

しかし、政策的失敗がなかったわけではない。第2次石油危機の対応はまずかった。台湾は金利の調整に遅れ、原油価格急騰分を市場価格に反映させず、中国石油や中国鋼鉄など国営企業が吸収したため、81年に第2次石油ショックの影響をまともに受けた。国営企業は軒並み赤字になり、不況による歳入減、公務員の大幅賃上げで、台湾の財政は18年ぶりに赤字に転落した。台湾企業は第2次石油危機の際、日本や韓国に比べ、省エネ対策や経営合理化で甘さがあったかもしれないが、1バレル＝40ドルの高価格時代を迎え、政府が原油価格急騰分を市場価格に転嫁すれば、民間企業や国民生活に大打撃を与えることは避けられない。それを懸念して招いた苦境だった。農産物への補助金、あるいは原油価格の一部を国家が負担し、企業や国民の負担急増を一時的に防いだとしても、石油危機のような大規模な価格高騰を一国家で防ぐのは難しい。

## 第2節 国民党政権を支えた公営企業

第二次大戦後、日本資本の諸企業は、国民党の手に移った。台湾にあった日本企業822社中、713社が接収された。<sup>(注19)</sup>

その中で、当時最大の産業であった精糖、電力、ガス、水道、製塩など重要産業が国営企業として再出発した。1952年当時、省政府が所有する省営企業も含めた公営企業は生産額で台湾の全工業生産額の56.6%を占め、その進出分野は鉄道、通信、鋳工業、農業、商業、金融にまで及んだ。1953年に民営化政策の一環として「公営事業移転民営条例」が公布され、農林、鋳工業の一部が民営化されたが、1970年代に鉄鋼、石油化学、造船など大型輸入代替工業が政府主導下に設立され、工業生産額に占める公営企業の比率が再び上昇した。公営企業の非能率による赤字が1983年前後から問題となった。

83会計年度に、日本で言えば通産省に相当する経済部直営国営企業13社のうち、6社が赤字を計上した。前年度上期には同15社のうち8社が赤字で、赤字総額は41億6000万元（当時のレートは1ドル＝40元）に達し、前年同期比258%の急増となった。

1982年2月、立法院の答弁に立った経済部長、趙耀東は「経済発展に絶対、必要であり、かつ収益の計算が立つ場合を除き、経済部は今後、国営事業の新規投資を認めない方針である」と言明した。こうした発言は国営企業の構造的な非能率さと民営化によって解決しようとする政府の方針から出ている。1952年当時、全工業生産額の43.4%を占めるに過ぎなかった民間企業は急成長し83年には80.6%を占めるに至った。趙耀東部長は国営企業の①従業員が士気が低い②責任者が企業経営に不得意である、と指摘した。1979年当時の台湾の大企業（売上高100億元以上、全部で13社）の上位3社は①中国石油②台湾電力③酒煙草専売局で、全部国営企業。トップ13社のうち8社が国営企業である。台湾の国営企業は数こそ少ないも

のの一企業当たりの生産額は民間企業に比べはるかに大きい。国营企業の収益は中央政府と省政府の歳入を支える大きな柱である。

台湾の直接税と間接税の比率は間接税が圧倒的に高い。83年度の国家財政収入の37.8%は直接税で、残りが間接税だ。その10年前は直接税が26.3%だった。国营事業の営業利益と事業収入は国家財政の15.8%（82年決算）を占める貴重な財源であった。酒、煙草、塩を専売事業とし、経営上の利潤を得るだけでなく間接税である専売税を得ていた。

一方、これとは別に国民党が経営する企業がある。国民党が50%以上の株を保有する企業は金融、石油化学、ハイテク、ゼネコン、出版放送など7グループ100社以上にのぼる。<sup>(注19)</sup>

前掲のスターリング・シーグレーブによると、蔣経国は1950年代、特務機関の長として黄金の三角地帯（タイ、ラオス、ミャンマー国境地帯）に駐留していた国民党軍を監督し、台湾政府は世界の主要ヘロイン商人となった。世界全体で2500億ドルとされるヘロイン取引の台湾の取り分はブラック・マネーとなって蔣経国政権の金庫に流れ込んだ、という。台湾の表経済と裏経済。裏経済は台湾経済全体の4割を占め、この中には地下先物市場、闇株式市場、闇外国為替網、地下銀行などが含まれる。竹聯幫が江南暗殺を引き受けたのは、ヘロインの対米輸送を汪希苓情報局長が請け負わず密約を結んだからである、という。<sup>(注20)</sup>

### 第3節 蔣経国から李登輝へ

蔣経国は江南事件以後、民主化を断行した。レーガン米大統領が85年8月17日、台湾の民主化を勧告したのを受けて翌86年9月26日、民進党の結成を認め、87年7月15日戒厳令を解除して国家安全法を施行した。同年11月2日、中国旅行を解禁、さらに88年1月1日、新聞の新規発行禁止（報禁）を解除した。

李登輝の総統就任はこの流れに沿って実現したといえる。蔣経国は1988年1月13日、総統官邸で吐血、不帰の人となる。総統代理を設ける案も一部にはあったが、死去後半日も経ずして、李登輝副総統が総統に昇格、宣誓した。台北の町は、突然の死去にもかかわらず混乱の気配はなく、大通りは小型車とオートバイでごった返していた。野党・民進党は蔣経国死去後1カ月間、デモと集会を自粛することを決めた。康寧祥・民進党立法議員は台北市内の自宅で「李登輝の総統就任は民主化の前進だ」と語った。

政治犯として10年余りの獄中生活を経て1月3日に釈放されたばかりの陳明忠氏も李総統に好意的だった。だが蒋介石未亡人の宋美齡や蔣家に近い保守派の一部は李総統が党主席に就任することに抵抗した。しかし、本省人（台湾生まれ）が国軍の85%を占め、財界は本省人が握り、納税者の90%以上が本省人である。李登輝を「お飾りの総統」にして、外省人が党主席となって総統をコントロールすることが許されるような情勢ではなかった。それほど本省人意識は台湾全島で高揚した。88年7月8日、国民党第13回全国大会（13全大会）で李登輝は主席に選出された。李登輝の党主席選出に当たっては、副秘書長だった宋楚瑜が党内非主流派切り崩しに大活躍した。宋は89年5月、李煥の後任として党秘書長に昇格する。

李登輝は後に、その「功臣」宋楚瑜も、台湾省を廃止することによって、結果的には切り（1998年）、総統後継者には連戦を選んだが、「宋・連相打ち」の格好で、総統の座は野党・民進党候補・陳水扁に奪われた。

李登輝は京都帝国大学農学部農業経済学科に戦前留学し、在学中、学徒出陣。終戦後、台湾大学に復学、48年同大学助手、56年助教授。57年台湾省合作金庫研究員、65年米コーネル大学に留学、農学博士号を取得。「台湾における農業と工業間の資本の流れ」と題した博士論文が68年度全米最優秀農業経済学会賞を受ける。米国から帰国後1971年に蔣経国に台湾農業問題を報告、農業復興会経済組長を経て、72年に行政院政務委員（国務大臣）、78年台北市長、81年台湾省政府主席、84年に副総統に就任した。国民党に入党したのは48歳で、米国から2度目の留学を終えて帰ってから。政治家としてのスタートは遅く、総統となったときも、国民党政権の「党」、「政」、「軍」、「特務」の四部門を掌握していたわけではなかった。

総統となった李登輝は1988年10月、党長老であり、外交に強い発言権を持つ蔣経国の遺臣、沈昌煥（総統府秘書長）を切って、元法務部長で李登輝に忠実な李元簇・元法務部長を後任にもってきた。翌89年6月行政院長の俞国華を更迭して党秘書長の李煥をその後任とした。李煥の後任には宋楚瑜・党副秘書長を昇格させた。同12月、軍に大きな影響力をもつ参謀総長の郝柏村を国防部長に転出させた。<sup>（注21）</sup>

90年5月に第8期総統に就任した李登輝は、実力者の李煥を更迭して郝柏村を行政院長に指名した。副総統は李元簇が就任した。軍人が行政院長（首相）になることは、軍政に逆戻りするに等しい、との一部国民の反対を押し切って就任させた郝柏村も93年2月に台湾省政府主席で後の総統候補、連戦と交代させられる。

李登輝は守旧派を交代させるに守旧派をもってしながらも、蔣経国の遺臣を徐々にはずしていった。郝柏村を行政院長から外した時に「蔣経国時代の終わり」が完了したといえるのではないだろうか。それまでは一面で蔣経国なき蔣経国の時代だった、といえなくもない。

一連の人事のもう一つのポイントは李煥だ。「武の王昇、文の李煥」と並び称された実力者の李煥を使って、蔣経国の番頭と言われるくらい蔣家と公私共に密接な関係にあった俞国華の勢力を政府から除き、軍を握る郝柏村を使って、李煥を更迭、その郝柏村を学者上がりの連戦に代える、という込み入った人事が、5年の歳月をかけて一つ一つ実行に移された。

李煥は李登輝の座を脅かすに十分な実力と経歴の持ち主だった。1917年2月8日漢口に生まれ、1946—48年まで瀋陽日報社長を務めたことがある外省人。若い頃から蔣経国に仕えていた李煥は戦後、青年救国団の主任秘書となり、副主任を経て、1973年に主任となった。青年救国団は1952年に蔣経国が自分の支持基盤を拡大するために創設した党組織だ。

李は救国団を通じ、有為の台湾青年数千人を育成し、各県市の党部弁公室（支部事務所）に優秀な本省人青年を送り込んだ。

地方の党部弁公室には、能力、素行の上で問題のある外省籍党員が少なくなかったが、こうした青年幹部と交代したことによって、党の手足は強化された。

李煥は1963年に国民党組織工作会主任と省党部主任委員となってから党内人事の権限を握り、蔣経国の党内掌握を助けた。李はまた精鋭幹部養成の革命実践研究院主任を務めた。同研究院での訓練を終えた幹部は党と政府の要職に就く。李煥は77年10月の中壢暴動での責任を取らされ、党と救国団における全職務を解かれたが、84年6月に教育部長として復活した。蔣経国時代末期の87年に党秘書長に就任すると、野党、民進党の結成を容認、中国へ外省人の里帰りを認めるなど開明的政策を進めた。蔣経国が88年1月に死去し、李登輝が総統に昇格、党務は李煥が取り仕切るようになった。89年6月、李登輝は行政のトップである行政院長に李煥を就任させ「両李体制」は、90年まで続いた。90年の総統選挙に当たり、国民党開明派を代表する当時73歳の李煥は保守的な党長老や軍首脳を抱きこんで、総統候補に林洋港司法院長、副総統候補に蔣緯国・国家安全会議秘書長を擁立しようとした。林洋港は本省人で地元南投県では人気絶大の政治家で、李登輝に途中で追い抜かれるまで本省人の出世頭だった。蔣緯国は蒋介石の「次男」であり、郝柏村・国防部長まで林・蔣コンビ支持にまわり、当時、党内に大きな権力基盤を持たない李登輝にとって、危機的状況だった。李煥は副総統の座を狙っていたが、李登輝に拒まれたため、反李登輝勢力を結集し、李登輝を中心とした主流派（改革派）に対抗した。

外省人長老を中心とした非主流派は守旧派で、蔣経国時代の名残にしがみついていた。第8期総統の党内指名は90年2月11日の党臨時中央委員会全体会議で行われた。非主流派は秘密投票（無記名投票）方式による指名決定を主張したが、中央委員180名中、出席169名の表決の結果、99対70の反対多数で秘密投票方式は否決され、従来通り起立採決となった。その結果、李煥、郝柏村、林洋港を含めて全員が起立し、李登輝と李元簇が正副総統候補に選出された。

ここで、勝負あった、と思われたのだが、3月21日の国民大会（ここで総統と副総統が正式に選出される）のその前に、総統候補・林洋港、副総統候補・蔣緯国の線がマスコミで報じられ、3月4日には200人近い国民大会代表が三軍将校クラブの午餐会に集まり、林洋港を総統候補に連署推薦した。

ここで飛び出してきたのが蔣孝武であった。

シンガポールから亜東関係協会駐日代表に着任して間もない蔣孝武が東京から舞い戻り、9日午前「中国国民党指導者同志への手紙」と題する公開状を辞表とともに、総統府に提出した。蔣孝武は同日午後、記者会見し①辞表を提出した理由は、国民党の一党员として公開状を発表するため②公開状は数カ月前から準備していた③連戦・外交部長には休暇を申請したが、辞表については話していないと語った。公開状の内容は、世界は「非共産化」の流れが大きくなり、大陸の非共産化と統一も遠くない、との認識を示した上で、この好機に台湾で内紛が生じたことは遺憾であり、党指導者は私心を捨て直ちに党改革を推進すべきだ、と呼びかけ、叔父・蔣緯国を批判した。蔣緯国は「蔣家のものが総統職を継ぐことはない」という蔣経国の言明を否定し、批判された。



立候補要請への諾否を明言しなかった林洋港は同日午後、台北賓館で謝東閔・總統府資政（前副總統，本省人）ら8人の長老と会談後、總統選不出馬の意向を発表した。蔣緯国も翌10日、台北賓館で8長老と会談後、立候補を断念した。

李登輝は3月21日、国民大会で投票総数668票のうち、641票を獲得して、第8代總統に選出された。5月20日、李登輝は第8代總統に就任、6月1日、李煥を更迭し、国防部長であった郝柏村を行政院長に任命した。李登輝に反旗を翻した郝柏村を敢えて行政院長に任命したのは戒嚴令解除後、悪化した治安の回復を図るのと、反李登輝派の非主流派を分断し、軍籍離脱させることで軍から郝柏村を引き離す含みを込めた人事であった。

郝柏村は1958年の金門島砲撃のとき、戦功をあげた。当時39歳の郝少将は小金門島を死守した。陸軍總司令官、總參謀長を歴任、89年国防部長に就任した。總參謀長の地位に8年間あった生粋の軍人で、反共、反台湾独立、反民主主義の人、との世評が高かった。それだけに、学生たちが内閣反対デモを台北などで連日繰り広げた。李登輝は3月21日總統に再選されると直ちに、国民党中央常務委員会を招集し、旧来の立法機関を超越した超党派の国是會議開催を党議決定し、体制変革を目指した。学生たちも、自分たちの提案が受け入れられた、として、矛を収めた。また4月2日、李登輝は野党指導者の黄信介・民進黨主席と張俊宏・同秘書長を總統府に招き、意見交換し、2年後の憲政改革実現を約束した。黄信介は美麗島事件で、デモ首謀者として逮捕され、懲役14年の判決を受けた政治犯である。張も同罪で懲役12年の刑を受けた。87年5月に仮釈放された。88年3月、ともに民進黨に入党、10月に黄信介は党主席に選ばれた。

89年に、大陸では天安門事件が発生し、中国政府は民衆を弾圧していると内外から批判された。それと比べると、野党勢力との和解を達成した李總統の政治手腕は鮮やかであった。90年5月20日、總統就任式で、李登輝は憲政改革を早期に実施する、と演説した。また同日、恩赦を実施し、美麗島事件の政治犯であった施明德と許信良（79年に米国に亡命、89年台湾に帰還、逮捕される）が、出獄した。この二人は、6月に開催された国是會議に民進黨推薦の委員として参加し、後に党主席となる。

一方、国民党の内部では李登輝ら主流派と反主流派の対立は、主流派優勢ながら、その後も続き、2000年の總統選挙で国民党候補・連戦の予想外の大敗への道を開くことになる。

#### 第4節 シンガポールと日本での蔣孝武

蔣経国は1986年、蔣孝武をシンガポールへ送った。リー・クアンユー首相は長男のリー・シェンロンを後継者として育成していた。政治家としての基礎を着実に固めているリー二世を息子に見習わせる親心が蔣経国に働いた。と同時に、国内にいれば、江南事件の関係で何かとうるさいので、ほとぼりが冷めるまで国外に置いておこうとしたのかもしれない。

リー・クアンユーと蔣経国は密接な関係を持っており、リーは1985年11月に台北を訪れ、蔣孝武が台湾入りしてから2カ月後の86年6月に台北をまた、公式訪問している。大事な息

子を預けた蔣経国の親心を受けての台北訪問であった、とみられる。

シンガポールでの蔣孝武の日常は秘密のベールに包まれていた。台湾誌「遠見」が蔣孝武とインタビューし、生活ぶりを明らかにした。<sup>(注22)</sup>

父と祖父の写真が掲げられた自室で会見した蔣孝武は「ここでの仕事はやりがいがある。台北にいるときは白髪がなかったのに、こちらに来て、ぽつぽつ出てきた」と頭に手をやり「リー首相がつねづね言っている言葉で、私が感心している言葉がある。人民に歓迎されない政策でも国家の将来の利益になるなら、やはりやらなければならないということだ」。

蔣孝武は、台湾とシンガポールを比較して、台湾では法治と公的信頼がない、と嘆いた。その例として、蔡辰洲・国泰プラスチック集団社長が死亡したとき、その死を疑うものが多数いた、と述べた。(蔡は前述したように放漫経営で同社を破産させ翼下の第十信用金庫倒産を招き、公的資金30億元が処理に使用された。立法委員を務め、国民党と深いつながりがある)。

「私はシンガポールに来るまで台北で11年間、メディアの仕事に従事した。1年前、こちらに来て、新たな勉強の機会を得た。われわれと中共の工作人員の数は同じだ。シンガポール政府は大使館員が政治活動することを許さない」と、活動が制約されていることを明らかにし「中華民国を台湾と書く者がいると、その都度、注意する。中華民国の呼称しかわれわれは受け付けられない」と、中華民国という国名に対するこだわりを、強調した。そして1986年に日本を訪れ政治家と料亭に行った際「私が先に入った。そうすると、入り口にいる記者が私を秘書と思って注目しないから」と述べ、名のある日本の政治家と会談したことを認めた。「お家の事情がなかったら、何が一番やりたかったか」との質問に「私はプロゴルファーになりたいかった。しかしこの年齢になっては遅すぎるが」と答えインタビューを締めくくった。

その答え通り蔣孝武のゴルフ好きは、有名で、シンガポールで最も伝統のあるシンガポール・アイランド・クラブのマネージャーは「蔣氏はこのクラブのニュー・コースでいつもプレーしている」と証言した。<sup>(注23)</sup>

蔣孝武は87年8月9日のシンガポール建国記念日のパレード観覧席に姿を見せた。しかし、指定された席は後方で、最前列に並ぶ各国外交官と差別された。蔣孝武は長身で落ち着いた身のこなしから、42歳にしてはややふけてみえた。ゴルフ焼けした彫りの深い顔立ち。周囲と談笑しながら、ふと退屈したような表情をみせた。傍らには、柔らかな黒髪を肩までたらしめた夫人が座っていた。24歳で白のワンピースが若さと清潔感を強調していた。

88年3月7日、江南暗殺実行犯の董桂森は米カリフォルニア州レッドウッド地方裁判所で陪審団に対し「事件は個人の行為や竹聯幫の行為ではなく、政府の行為だ」と証言した。殺人実行前に竹聯幫組長・陳啓礼は「蔣孝武がこんどの件のボスだ」と語り「蔣孝武はこの計画に大きな関心を抱いており、この件に成功したら、国家への一大貢献になる」と言って激励した。「汪希苓海軍中將(国防部情報局長)をこの謀殺事件の最高責任者にする予定だ」と蔣孝武が陳啓礼に語った、と董は証言した。<sup>(注24)</sup>

88年5月、董桂森は同地裁で懲役27年の実刑判決を受けた。董は事件後、フィリピンを

経てブラジルに潜伏していたが、逮捕され、米国に身柄を引き渡された。一方、一審で無期懲役刑を言い渡された陳啓礼は「汪希苓情報局長から命じられた国務を遂行したものであり、刑罰を受ける理由は刑法上ない」として再審請求訴訟を起こした。

江南の妻・崔蓉芝は85年にサンフランシスコ連邦地裁に「中華民国政府」と暗殺犯を相手取り総額3億ドルの損害賠償請求訴訟を起こしたが、棄却され、改めて連邦第9巡回上訴裁判所（高裁）に提訴した。崔蓉芝は90年9月27日、台湾政府から慰問料として150万ドルを受け取り、和解した。

88年8月8日、蔣孝武はシンガポール商務代表に昇格した。

代表を8年間にわたって務めた前任の胡忻は同日辞任し、3年間副代表の職にあった蔣孝武が大使と同格の地位を手に入れた。蔣孝武は43歳になっていた。シンガポールの聯合早報などの主要新聞は蔣孝武が台北文化大学政治学修士で、国民党が経営する中国広播公司總經理と中華全国広播（放送）テレビ事業協会理事長を歴任した、との経歴と顔写真を付けて3段程度の地味な扱いで報じた。

翌9日は恒例のシンガポール建国記念日集会で、国立競技場で華やかに開催された。就任したばかりの蔣孝武は競技場内のレセプション・ホールで記者団に取り囲まれ雑談した。「6月に日本へ言ってきた」と日本人記者に語ったが、話が政治問題に及びそうになると「これは記者会見ではないから、これから先はだめだ」と言って、退席した。

蔣孝武は88年12月8日、商務代表として台湾立法院外交委員会に出席し、康寧祥立法委員らの質問に答えた。

「江南事件の董桂森と陳啓礼の二人は、事件の黒幕はあなたであると証言しているが、どのように解するか」との質問に対し「私はこの事件に関係したことはなく、話すべきことはない」と答えた。委員の質問は国共合作問題から台湾がシンガポールに置いてある外貨建て預金の口座名義人が蔣孝武になっているとの噂の真偽、それに外国での不動産所有問題まで、多岐にわたった。「私が外国に不動産を持ったりすれば、自分の国を信賴していないと他人に言われるだろう。また国内にそれがあればヤミ不動産屋と言われるだろう。父が在世中は公邸を支給されたが、死去とともに返還し、現在は義父の家に帰国したときは厄介になっており、妻に少し申し訳ないと思っている」とそつなく答えた。蔣孝武は質疑の中で、徐立德・前財政部長が関係して設立した投資会社があることや、全部で13の台湾系公営事業会社がシンガポールで営業しているなどの事実を明らかにした。委員の一人が「あなたの外交官の資格は試験で取ったのか、あなたの父がくださったのか」と尋ねると蔣孝武は「海外駐在代表は總統の職権で派遣が決定される。自分はその資格を有していたのでなった。信用しないのなら調べてもよい。出身家庭は関係ない。相手国が同意するのは、その代表の能力を受け入れ同意したということだ」と言い放った。<sup>(注25)</sup>

1989年3月9日から4日間、李登輝は總統就任後初の外遊先としてシンガポールを訪問した。そこで、リー・クアンユーから中国との国交樹立の意向を伝えられた。シンガポールは

東南アジア諸国連合（ASEAN）の中で最後に、中国と国交を樹立する、との原則を持っていた。ASEANでシンガポールを除き、ただ一国中国と国交のないインドネシアが、中国と国交回復することでこの年の初め、合意したからだ。

4月14日、蔣孝武の兄で、長く療養生活が続けていた蔣孝文が台北の榮民病院で喉頭がんのため息を引き取った。53歳だった。陸軍士官学校を卒業、米カリフォルニア大学バークレー校に学び、ジョージタウン大学を経て、1962年に台湾電力に就職。70年に中台化学工業副社長に就任したが、糖尿病が悪化、70年代から療養生活が続けた。療養中、巷間、梅毒説が流布したが、宴会で飲酒後、うたた寝して定時の薬服用を怠り、血糖値が下降し脳に障害が及んだ、との説もあった。死亡する10年余り前からは自宅から通院治療を受け、記憶力もかなり回復し、車で市内を回り、友人宅を訪れるまでになった。

89年5月、日本はリクルート事件で藤波前官房長官が収賄罪で起訴された。竹下首相は予算成立後、辞任すると発表、シンガポールなどASEAN 5カ国を歴訪した。一方、大陸では4月の全国人民代表大会中に急死した胡耀邦前総書記に同情が集まり、百万人近い学生、大衆が民主化を要求して、北京の天安門広場に集まった。6月4日、戒厳令下に人民解放軍が銃弾によって、学生大衆を解散させ、広場は流血の惨状を呈した。台湾では6月に蔣家の大番頭、俞国華が行政院長を辞任、73歳の李煥が就任。

90年1月、蔣孝武は亜東関係協会駐日代表部の代表に任命された。赴任前、日本人記者団と会見した蔣孝武は、江南事件の前に国家安全会議の副秘書長をやっていたかという質問に対し、「公開の席でなんども否定し、立法院でも否定した通り、副秘書長であったことはない。この話題はもういい」と述べ、江南事件との関連を否定した。また天安門事件について、それが共産党統治下で起きたことを強調し「ソ連もついに破局に立ち至った。日本の対中経済援助について論評は控えるが、中国問題は中国人の問題であり、中国人が中国の将来を決定する。将来展望にたって、中国問題を日本は考えるべきだ。世界の流れは変わった。中共も変わるだろう」と述べた。日本での政治家との付き合いには「多くの方を知っている」と述べるにとどまり「88年4月に北海道を訪れたとき鳩山由紀夫代議士らと会った」と語った。<sup>(註26)</sup>

90年5月20日、台湾で特赦が実施されたが、竹聯幫の陳啓礼は釈放されなかった。陳とともに国防部情報局で訓練を受けた竹聯幫幹部で映画プロデューサーの帥獄峯（当時45）は、この決定に反発し、次のように述べた。

陳が米国に行き、江南を暗殺したのは汪希苓情報局長の口頭による命令であり、これは「完全に命を受けての行動で」当時の政治環境からして愛国的行為である、と帥獄峯は主張した。

帥獄峯は法廷で証言を求められたとき「汪希苓が陳啓礼に与えた命令の内容ははっきり知らない」と述べた。しかし、これは偽りで「実はその日、汪希苓と胡儀敏（情報局副局長）、陳虎門（副処長）、陳啓礼、帥獄峯の5人で、情報局陽明山訓練基地の食堂で会食したとき、汪希苓は陳啓礼に、米国へ行って江南を制裁しろとはっきり言った」と述べ、陳の行為が上層部の命令を実行したものである、と強調した。

90年8月イラク軍がクウェートを占領、世界は湾岸戦争へと旋回していく。9月27日、江南・未亡人、崔蓉芝は慰問金として150万ドルを台湾政府から受け取り和解に応じた。程建人外交次長（外務次官）は「江南事件は国家の体面を傷つけるものであり、人道的見地から妥協を受け入れた」と語り、慰問金の支払いは同情から発したものであって、有罪や責任を認めたためではないが、3人の政府の役人が連座しており、事件を深刻に受け止めざるを得ない、と付け加えた。<sup>(注27)</sup>

そして10月、シンガポールは中国との国交回復を発表した。このとき、蔣孝武は日本からシンガポールへ行き、折から表面化した尖閣問題で日台関係が険悪となったときに、任地にいないということで、本国で問題となった。蔣経国はシンガポールへ行ったのは公用である、反論した。

翌91年1月21日午後、台北監獄から汪希苓・元国防部情報局長と竹聯幫組長・陳啓礼、同組員・吳敦が釈放された。陳啓礼と吳敦の二人はボディガードとともに、出迎えの車に乗って台北市警パトカー先導の下に台北市忠孝東路のホテルに向かった。このホテルで記者会見した陳啓礼らは「俺は命令を実行しただけだ。詳しいことは上官の汪希苓に聞け」と述べ、自らの行為を正当化した。汪希苓は出獄後、外部との接触を拒み続けた。刑務所暮らしが6年間で済んだのは「民国80年減刑条例」が91年に立法院で成立したためであった。

91年5月、蔣孝武は李登輝に辞表を提出し受理された。後任には日本に留学した経験を持つ許水徳・内政部長（後に、党秘書長、考試院長）が内定した。蔣孝武の東京生活は1年3カ月にすぎなかった。表面上の辞任理由は帰国して老衰した母親の看病をするということであった。しかし肉体的に、日本での職務遂行が困難であった、という裏の理由は隠されていた。

亡くなる半月前、日本から帰国した蔣孝武は91年7月1日午前5時45分、台北市の病院ですい臓ガンのため死去した。46歳だった。

## 注

- 1 The Lords of the Rim, Sterling Seagrave, G, P, Putnam's Sons, New York, 1995. 邦訳「華僑王国」サイマル出版会 P 304
- 2 中央日報 1985年4月20日
- 3 台湾日報に江南が在職中の上司で、国民党中央党部文工会の要請を受けて、1983年12月米国に渡り、江南に「蔣経国伝」の内容変更を求めた。江南は台湾当局が代償として8000ドル支払うことを交換条件として求めた。夏は汪情報局長に伝達、承諾を取り付けた。
- 4 中央日報 1985年2月28日、同3月22日、同5月11日。  
中央公論 1985年8月号 磯野新「三重スパイ（？）江南暗殺の怪」 P 324
- 5 台湾独立建国聯盟発行「台湾青年」1993年6月号、P 13。  
同誌は「江南暗殺事件は蔣経国が命令」と題する以下の記事を掲載した。江南（劉宜良）の暗殺事件における、未亡人の法定代理人である謝長廷弁護士・立法委員は4月9日、江南は「吳国楨伝」の執筆中に、蒋介石と蔣経国の一族の機密を発見し、それを立証しようとして国民党当局に知られ、口封じに暗殺されたもので、蔣経国が命令したと語った。ちなみに、事件の関係者の一人で当時、国防部情報局の部長であった「陳虎門」大佐は、入獄して釈放された後、1992年10月に名前を「陳奕樵」に

変え、翌年1月に陸軍少将に昇進している。つまり陳虎門にとり、江南の殺害は蔣経国總統の命令による任務遂行であった。香港誌「亞洲週刊」2000年7月10日—16日によると(P 19)、陳虎門は、釈放後、国家安全局の東南アジア地区の顧問をしていたが、2000年7月1日、正式に情報治安の世界から引退することを決定した。陳虎門は江南事件後、タイで情報工作を続けた。陳水扁新政権成立が、早期退職の動機らしい。

6 「華僑王国」 P 290

7 同上 P 305

8 曹聚仁「蔣経国論」(香港, 創聖出版社, 1954年)の邦訳「蔣経国と台湾」(三一書房, 鈴木博訳, 1978年)の訳者あとがき P 209 - 215

9 1979年以後、国泰グループに入社した者をみると、国泰プラスチック傘下の「理想工業」董事長に元政戦部副主任で中將だった蕭政之、国泰プラスチック集団傘下の国際海運副董事長の葉潜昭(情報局長だった葉翔の子)、国泰プラスチックのパブリシティー担当・蘇成章(警備総司令部の退職幹部)、十信財務副經理の吳国揚(同)、国泰信託集団傘下の「海陸營造」「国建金属」「国建機電」など3社の董事長を務める華心権(元陸軍政治部主任, 元中將)などいずれも、王昇と密接な関係にあった者たちだ。

10 香港誌「亞洲週刊」1999年11月1日—7日号 P 86

11 米週刊誌「ニューズウィーク」1985年4月1日号 P 10

12 中国共産党機関紙「人民日報」1984年12月12, 13, 17, 18日。

13 俞国華行政院長が1985年2月に立法院での施政方針演説で明らかにしたところによると、1984年の台湾の経済成長率は10.9%で、79年の第2次エネルギー危機以来最高を記録した。

14 1985年2月11日付け「ニューヨーク・タイムズ」は「台湾の長い腕」という社説を掲げ、陳文成(1981年)や江南暗殺のような事件が起きるのは、台湾が一家族、あるいは一政党が支配する警察国家であるからだ、と指摘した。

15 良雄「戴笠傳」(傳記文学出版社, 1982年) P 86。沈醉 文強「戴笠其人」 P 229

16 中国社会科学院近代史研究所「民国人物伝 I」(1978年) P 314

章君毅「杜月笙傳」第2冊(傳記文学出版社, 1983年) P 86

17 「台湾青年」184号 P 13。若林正丈「台湾 分裂国家と民主化」(東京大学出版, 1994年) P 86。若菜正義「蔣経国時代の台湾」(教育社, 1978年) P 35 - 36

18 蔡焜燦「台湾人と日本精神」(日本教文社, 2000年) P 179

19 小林重雄「台湾の民主化と国営企業民営化」上(中華週報, 2000年6月8日)。同論文の下(中華週報, 2000年6月22日)によると、1997年公営事業移転民営化推動專案小組は公営企業85社のうち47社を選定し、5年以内に民営化するという時間表を制定した。2000年3月末までに民営化を実現した企業は15社である。党営企業について、2000年3月1日付け朝日新聞は「『財迅』のまとめでは、党が直接経営権を握る企業のうち財務資料を入手できた43社の総資産は6053億台湾ドル(元)に上る。国民党側はこの金額を否定。投資会社7社の総資産は1470億台湾ドルと説明している」と報じた。

20 「華僑王国」 P 301

21 伊藤潔「台湾」(中央公論社, 1993年) P 220

22 1987年「遠見」7月号。同年8月7日付けシンガポール紙「聯合早報」が転載。

23 1987年当時、シンガポールに共同通信特派員として勤務していた筆者の取材に答えた。

24 「台湾青年」1988年4月号 P 21。董桂森のこの証言に対し、台北監獄に服役中の陳啓礼は「蔣孝武は江南事件と無関係だ」と否定した。(1988年3月20日, 聯合早報)。陳啓礼によると、江南暗殺の原因は「吳国楨伝」の執筆で「同書が暴く秘密は多くの人が耐えがたいものであった。汪希苓の上には当然、誰かいて、江南暗殺を命じた。しかし、それは蔣孝武ではない」と述べた。

25 1988年12月10日付け「聯合早報」。

26 日本人記者団との会食形式の懇談は1989年1月22日行われた。

27 1990年10月26日台北発ロイター電。